「授業参加観察に関する座談会」記録

この座談会は、本プロジェクトの初年度のリフレクションのため、平成12年12月25日に高等教育教授システム開発センターのある、京都大学楽友会館2階会議室で行われたものである。ご出席いただいたのは、総合人間学部の河野敬雄教授、小田伸午助教授、大学院工学研究科の川﨑昌博教授、人文科学研究所の冨谷至教授であり、本センターの教授の藤岡完治、及び助教授の石村雅雄が加わり、センター長の荒木光彦・大学院工学研究科教授に御挨拶をいただいた。各先生には本原稿をチェックしていただいているが、最終的な文責は、石村にある。

〔荒木〕本日は、お忙しい中、御参加いただきありがとうございます。
今年度から藤岡先生が着任いたしまして体制が整いましたので、授業参加観察プロジェクトを始めさせていただきました。今年度はとりあえず見せていただくということに重点を置いてきたわけですが、一度これをまとめて、また来年から活動するための計画を立てたいと考えておりますので、よろしくお願いします。皆さんそれぞれの分野でFDは取り組まれていると存じますが、その多くは、技術的な面に中心を置いてやっておられるのではないかと思います。それはそれなりに、講義をするということについては役にたつのか分かりません。しかし、大学の授業には、いろんなスペクトルがあって、演習から、実験から、体育の授業から、ということになりますと、そうそう簡単に、そんな技術的な側面だけをやっておったんでは、多分だめだろうと思います。技術的な側面というのは、全体の一割も満たない所を満たすものであろうと思います。こういう観察をさせて頂いて、皆さんのご意見と学生の意見をリサーチしながらFDを作って行かないと、いたしかたないだろうと思います。そのため、こういう所へ来ていただくのは、大変ありがたいことだと思っております。よろしくお願い致します。

〔藤岡〕どうもありがとうございました。
ご出席の先生ですが、河野先生から自己紹介を簡単にお願いしてよろしいですか。

〔河野〕総合人間学部の河野です。見て頂いた授業は、私は基本的に数学ですので、理系の方になってます。一回生、二回生に全学共通科目というのがあって、これはクラス授業ですから、わりかし共通にはやってますが、現実には教える内容については相当に自由です。教科書も指定しませんし、たぶんに教授者個人にまかされている面があります。私の場合は、今回はちょっと例外でして、経済学部を2クラスに分けて、「数学基礎」と言って、一回生の授業をまとめて2コマ続きのやつを、試験的に10年位前からやっておりまして、経済学部からの要求で、10年位前、経済学には数学が大事だということで、やり始めた一クラスを担当したのです。ただ毎年担当者は困ってまして、やはり経済っていいますと文系ですから、入学時に数学を理系のようにはやってないんですね。それですから、担当者によって随分苦労しています。私自身も今年初めてもってる所を見て頂いて、初めての経験だったので、がんばった分についてだけは、意欲を認めて頂くかもわかりませんけれども、実際には非常に困難な授業だった、という風に思ってますし、反省点は自分自身多々あるんですけど、こういう機会に皆様と意見をかわしてみたい、そういう感じを持って参加させていただきました。

〔川﨑〕私は工学研究科の川﨑です。見ていただいたのは2つありまして1つは「基礎物理化学」。これは一回生授業で、それから三回生の「物理化学4」というアドバンスコースの合計2つを授業参観していただきました。前者の方は一回生なので、学生の意欲も高まっているのですけど、後者の方は三回生で、もう学生が、こういう言い方したら悪いですけど、すれてきてしまって、なかなか先生と学生のせめぎあいと言いますか、何とか引き付けようと思うのですがなかなか、それがうまく行かなくて、こういう会で色々 suggestion いただければ、これからの授業の参考になると思います。私は、工学部の物理化学系の「物理化学」の世話役もやっておりまして、ここの会合でのご意見も反映させて頂きたいと思います。

〔石村〕センターの石村でございます。各先生本当にどうもご協力いただきましてありがとうございました。今日は一参観者という所から、最初の報告だけさせていただきますが、忌憚のないご意見をよろしくお願いいたします。

〔小田〕総合人間学部の小田と申します。専門領域はスポーツ科学、運動生理学方面ですけれど、今回見ていただいた授業科目は「運動科学」というタイトルの全学共通科目です。どんなことかと言いますと、一つは運動科学に関する科学的な側面の人の動き、スポーツにおける人の走り方や打ち方、投げ方、そうした物のバイオメカニクス的なデーター、或いは運動生理学的なデーターが語る客観的な知見ですね。それを片方におきまして、もう片方側に、自分自身が経験した運動を内的に自分の主観性でとらえるとらえ方、特にこれがスポーツ選手、一流選手がたけておりますので、その客観性と主観性のずれということをテーマにして授業をしだしたのは6～7年前からでしょうか。それを少し形として意識してきたのは5年位前からです。結構反応があるようでして、調子にのってやってたんですけど、今回こういう形でこちらの先生方とお知り合いになりまして、自分の授業をビデオで撮って頂いて、自分もそれを見る機会があるなんて初めてでした。嫌なもんですね。自分の声も嫌な声ですね。これが私の授業のテーマなんですけど、自分で自分をどう見るか。声も嫌ですし、しぐさも嫌ですね。ただ今日、家で冬休みごろごろしている子供達に、お父さん、ほんまに大学の先生しているんだ、という所をちょっとだけ見せてやろうと。権威が失墜ぎみですので。私の人生にとって大きな turning point になるんじゃないかと期待しております。先生方と色々お話し出来る事を楽しみに今日はやってまいりました。よろしくお願い致します。

〔冨谷〕人文科学研究所の冨谷と申します。私は法学部の東洋法制史を担当し、三～四回生及び大学院の共通授業をやっております。2回観ていただいた訳ですが、私の授業は、主として中国古代の、今年は「法と習慣」という題でございます。だいたい授業は2時間～3時間で一つのテーマをとりまして、オムニバス形式でやっております。大学院の基礎法の院生も入っておりまして、また三回生の学生もきております。私としましては受講者に幅がありますのでやりにくいこともあります。私は教壇に立ちまして20年以上になるのですけど、ここにきてすっかり自信がなくなってきたんです。授業のやり方、その他の点でもどうしたらいいのかと迷っていました。そういった中で藤岡先生の方から、授業の改善その他の形態の取組という話がきまして、私自身の改善にもなりますし、喜んで協力したいと思いました。それと同時に京大の中で、とかく研究所というのは、特に人文研というのは、教育をもうひとつなおざりにしている、と批判を受けています。研究ばっかりしてと。私自身及び研究所の人間も、これから本格的に学生の教育に取り組んでいかなければならない時期に来ていると自覚しております。そういう意味でいくつかのご意見をお聞きして、また教育ということに積極的に取り組んでいきたいと私はそう考えています。ひとつよろしくお願い致します。

〔石村〕この会は、お願いしましたように、平成12年度の教育改善経費をいただきましたので、これまでの取り組みと本日の先生方のお話しをまとめて報告書の形で整理したいと思っています。この原稿は、後ほど先生方にチェックしていただくという事でお願いしたいと思います。

このプロジェクトのそもそもの背景は、河野先生もよく御存知かと思いますが、公開実験授業というのをずっとやってきて、今年で5年目になっております。月曜日の4コマ目の授業を公開いたしまして、その後検討会をするということをずっと5年間やってきているのですが、なかなかこれが京大の先生の中に広がっていかないというのが最大のネックでして、私共で一回調査をさせて頂いたことがあるのですが、その中でもやはり忙しいと、で正直言って2時45分に始まった授業で、検討会が終るのがだいたい5時30分から6時でございますので、なかなか来て頂けない。延べでだいたい10人位。昨年は例外的に、大学院工学研究科の柴田先生に1年間付き合っていただいたということがありましたが、基本的には臨時的な参加にとどまるという所になっております。じゃあそれをどうするのか、という事で、いろんな方法があると思うのですが、やはり自分の授業を問い直していくという教員の意識改革、それをどうするのかという事を考えていく。例えば、伊藤秀子先生というメディア教育開発センターの先生は、先ほど小田先生が自分のビデオを嫌なもんだと言っておられましたが、「自己のふり見て我がふり直せ」という方法で自分の授業を見てみようじゃないか、というプロジェクトをしておられます。私達のプロジェクトという

のは、自分達の授業を公開して、昨年からはリレー方式で、観察者も授業をしてみるという形でやっているのですが、そこをどうするのか。授業を見ていくんだという所から始めていこうと思っていたのですが、それが広がらない。それが藤岡先生が４月に赴任されて、あっという間に突破されて、全学に手紙を出してみたら60人以上の応答があったという所から始まっています。もともとバックグランドはそういった所にあります。中身は、もう今日お集りの先生方には、すでに授業を見せて頂いたのでお判りだと思いますが、大学の授業の参加観察と学生による授業リフレクションという所を中身にしておりまして、資料でお配りしましたが、藤岡先生なり私が入らせていただいた時には、「授業参加記録」というＡ４版メモをさせていただいてますが、これをもって先生方の授業を見せていただきました。だいたい藤岡先生は慣れていらしゃるので、１回で５枚位ですね。僕なんかだと、なかなかうまくまとまらないので７～８枚かかるのですけれども、これをまず書きます。それと先生方のご了解を頂いて、授業のリフレクションシートを学生に書いてもらいます。そして各先生方にその授業が終って、授業へのコメントという形で、この参加記録とリフレクションシートの回答を元にしてお返しするということを、ずっと繰り返してきました。これまでにだいたいご協力の申し出は60人程あったのですが、なぜかですね、月曜の１、２限であるとか、火曜の１、２限に集中するなど重なった授業がいくつかありまして、見せていただけない授業もあったのですが、合計で丁度、今70見せていただきました。２回目も含めまして延べ70になりました。それが今、数的な段階です。最初はいくつか誤解も受けたりしたこともあるのですが、朝日新聞に取り上げられた時にも、我々が考えているのは大学教官とセンター教官が共同で行う授業改善の試みであり、大学内のさまざまな授業に学生の視点で授業参加観察を行うのだということでやっていたんで、あくまで相互研修だということでした。ところが朝日新聞の報道では、我々センターがプロで、京大の他の先生方の授業を指導していくんだ、っていう報道のされ方をして慌てました。東海大学の教育支援センターっていうものが考えられているそうですが、このようなことをするのではないんです。ノウハウを教員に提供していくような、こうこうこういった授業を提供するんだ、ということにあたって、共に考えて議論していきたい、こういった場を多く持っていくことによって授業の改善につなげていきたい、という発想をもっています。やはり各先生の授業には、すごくそれぞれの文体がおありなんですね。全般的にいって非常にみごとな授業をしておられる。先ほど冨谷先生が悩んでおられるっていうのが、とても考えられないようなみごとな授業をしておられる。それをじゃあなんで悩んでおられるのか、是非考えたいのですが、どの先生も非常にみごとな、それぞれの文体を持って授業をしておられるわけで、そこを壊して、それを越えてですね、何かこんな方法があるんだ、という言い方は絶対できないんだということに確信を持つに至っています。互いの文体を大切にしながら、こういう場をもって話し合っていくこと、この資料は全部来年３月に資料集の形で公開いたしますが、それを元にしてまた語っていただく事を考えています。そして、それをつなげていく、メーリングリストへの参加をお願いしたと思うのですが、ほぼ全員の先生から「参加してもいい」というお返事を頂いておりますので、現在コンピューターを総長経費の方から買っていただきまして、今準備中でございますので、本年度中にはメーリングリストという形で、さまざまな授業の情報であるとか、授業改善の情報が各先生のところに、メールの形で提供できるということになると思います。最後ですが、授業観察プロジェクトっていうのは、授業を監視じゃなくて観察しあうんだということ。教育共同体で、それを元にしながら、我々のやっている公開実験授業を、常に月曜の午後にやっておりますので、これを例えば見に来ていただく。授業を見せていただいた総合人間学部のフランス語の松島先生にこの前来ていただきました。そういった形も始まっておりますので、そうした形で授業を改善していく方法を考えていこう、ということで来年以降進んでいこうと思っています。現状は以上です。

〔藤岡〕どうもありがとうございました。これまで見せていただく中で、何もご報告申し上げられませんでしたので、簡単に10分程度なんですが、授業の参加観察で何を見てきたんだということがあるかと思いますのでお話ししたいと思います。石村さんからお話しがありましたように、私は参加していて、やはり先生方、すごい授業をされているな、というのが率直な感想です。それを切り刻んでしまうみたいなのは、とても後ろめたいんですけれども、どんな所がその授業の中に組み込まれているだろうか、というのを内容分析するような形で、先ほど石村さんの話にありました、授業のコメントの中からそれを整理してみたんですけど、まだ全部整理できてなくて申し訳ないんですが、途中経過ということで、ざっとこんなものだということです。例えば一番最初に「課題の明確な提示」と

いうのがございまして、この記号は、先生のイニシャルです。その授業の中でどんなことが見通せるか、ということなんですが、「課題の明確な提示」のところでは、たとえば復習ということをふまえながら進行していくだとか、或いは説明をしながら課題を提出していくだとか、さまざまな方法があるということです。そういうような方法で全部分析していきますと、課題意識をもたせる授業の構造を、前もって準備しているとか、具体と抽象の橋渡しをする、これがとても多いのですが、やはり先生方は、ここでも学生の学びを喚起しようとして苦労されているのが見えると思います。それから内容そのものを工夫するということ、それから学問研究の面白さと厳しさを教えるということ、これらは先生方、意識されているかどうかわかりませんが、学生の席にいますと色々伝わってくることです。学問の方法を教えるということですね。特に理系の先生方に強かったと思います。或いは文系の先生ですと、今度は研究の質というようなことを特に織りこまれてお話しをされている。学問の研究者っていうのはどういう態度が必要なのか、というようなことだとか、或いは学問研究のしかた、学び方や考え方ということについて教えるというのがございます。課題はなるべく現代性のあるものということで取り組まれて、身近なことや、日常と繋げながら、専門的な内容を教えるということ。これは専門科目或いは全学共通科目、両方共で大事にされているというのは分かりました。教科書を学生に対象化させて、研究するという所に導こうとする働きかけが随分あります。また全学共通科目の特徴だと思いましたが、自分自身であるとか、自分が育ってきた文化というものを対象化していく、そういう習慣を身につけさせようという働きかけをしておられます。今回見せて頂いたのは、どっちかというと講義といいますか、先生が中心というのが多かったですが、学生を活動させることによって学ばせようというのが、語学の先生を中心にしてありました。また、相互性の確保ということですが、学生とのコンタクトを取りながら教えるっていう工夫です。それが相互性の確保と名付けたところです。もちろん、それと関係するのですが、学生の経験をその場で教材化する。学生の思いだとか、つぶやきだとか学生の疑問をそのまま授業に持ち込んで解説する。また語学の先生なんか、特に外国人の先生に多いのですが、学生を授業に参加させる。どういうように次の授業を持とうかというのを提案して、学生の希望を採るというような事をされていました。それから教師の身体表現というとこで、これは私、とっても驚いたんです。私は、小中高等学校の授業研究というのを長くやってきたんですが、大学の先生というのは、あまり身体表現はないのかな、と実は思い込んでおったんですね。そうしましたら、実に身体表現、例えば、物質の構造や運動にも身体を使われますし、内容と自分の身体とを関連させているんです。外国人の先生が担当されている全学共通科目でしたですかね、レヴィストロースはどういったかというと、教壇の右側から学生に向かって話をする。そして、つたつたと歩いて逆の左側のコーナーの方に立って次の新しい思想家を出してきて、そこからまた演説をする。そういう様な授業をしていまして、まさに役者だなと思ったのです。それから学生自身にも身体を使って表現させる。これは語学の授業に多かったです。ただ口先だけで発音したり、表現させるだけでなくて、動作をともなって表現させる、ということを随分工夫されていました。形成的評価、途中で質問を求める、とか、尋ねる、だとか、机間巡視しながら学生に教えるとか、プロセス評価といいますか、そういうこともやっぱりやられているんだな、というふうに観察しました。「教師と学生のズレ」ということなんですが、最初の授業の前半の部分、かなり丁寧に復習をしながら進めるということがあるんですが、途中から難しくなるのが、特に理系の授業で見られました。これ、私の学力不足もあるんですが、エネルギーのカスチリアーノの定理というんでしょうか、という所で、なんか私が参加していましても、周りの空気がパアーと止まったといいますか、学生が思考が止まったりですね、こうバタバタと寝始めたりするんです。ああ、やっぱり難しくなったんだな、と思ったわけです。それから系統性と順序性、これは特に理系の専門科目を中心にして、教科書を使う所がある、シートを準備する所があるという形で、とても順序よく内容を教えている。後、メディアですね。メディアも随分色々工夫して用いられています。言葉の説明だけじゃなく、図と説明と合わせながら思考を導くという様なことがされていました。薬学部の先生方は、プリントを使いながら、プリントにそった指導をされまして、とても、学生をおちこぼさせない、といいますか、配慮されていると感じました。「教師の自己開示」ということについては、これも大学の先生が、こういう御自分のことを開示されるというのがとても不思議だったんです。「私もよく間違えるんですよ」とか「自分で考えて下さいね。夕べやってみて、答え私間違えてましたから」とかですね。そんなふうに率直に御自分のことを言われています。「まだこの本、私も読んでませんけれども、とてもいい本だといわれてます」など随分率直に語られるんだなと。それから、学生に対する思いを伝える。これは全学共通科目の

中で観察されたことです。やっぱり学生を学問する仲間として見ているんだという、そういうことを学生に伝えようとされてるんだなと思いました。それから同じように全学共通科目で観察されたんですが、自分がどうやって研究者として形成されてきたかという自己形成を、授業の中で語るというようなこともありました。特にですね、ある先生はとてもなんかアクチャリーといいますか、自分が学会の最初の発表時に、どんな経験をしたとか、その後どうやって度胸をつけていった、だとかですね。どんなふうにすると勉強が進むとか、見栄をはらずに日本語で読もう、とかですね。そういうふうに、身近な所から、学問研究の先輩としての自分というのを語られていたと思います。その他、特に分離できない様な項目等ありまして、まだ本当に雑なまとめなんですが、この後、これを少し構造化していきたいと思います。おおざっぱに、いわゆる専門の科目と全学共通科目とを見てみますと、専門科目の方はやっぱり課題を明確に提示することとか、抽象と具体の橋渡しをすることとか、身近なことや実情と研究をつなげる、それから学生の興味を保とうとするんですね。後、メディアの活用、形成的な評価、テーマを今日的なものにしようとか。後、学問の方法や学び方、考え方ということを自分のなかで強調していくということが一つの特徴として浮かび上がってきました。しかし全学共通科目の授業としては、身近なことや今日的なものとかいうのは同じなんですが、学習における身体性、語学を中心にしてですが、それを強調していくとか、研究者としての自己形成を語るとか、学生に対する思いを伝える、とかいう事は専門科目ではあまり見られなかった事でした。学び方や考え方を教える、これは共通なんですが、特に強調されているのが、自分だとか自分の文化というものを相体化する事が大事なんだというように伺いました。雑駁ですが、これまでの参加観察からの見えてきたことについて御報告申し上げました。何かご質問ございますか。

〔河野〕先生が御覧になった授業の中で、いい授業だなと思われた中で、共通性っていうもの、あえて三つあるとすれば、どんな点をまず先生としてあげられますか。

〔藤岡〕先程申し上げました様にですね。専門科目、特に理系の授業の特徴だと思いますが、やはり課題の明確な提示と抽象と具体の橋渡しという事に、とてもやっぱり力を入れてました。形成的評価ですね。進め方は理系の先生というのはだいたい、そうなのでしょうか。前の時間に課題を出しといて、その課題をOHPで見せながら解説したり、また次、課題を出す、という、そういうパターンがとても多くてですね、そういう意味では、すごく手堅い授業が多いと僕は思いました。

〔河野〕論文の書き方そのままですね。

〔藤岡〕まあ、そうですね。

〔河野〕イントロダクションして、そこに仮説、課題があって。

〔藤岡〕そうですね。

〔河野〕目的はこうなんだ。そうなると、その方法はこうなって。

〔藤岡〕そうですね。

〔川崎〕工学系の先生と理学系の先生とまたちょっと雰囲気が違いまして、今のはどちらかと言いますと工学系の先生方の雰囲気かなと思うのです。理学系の先生は、割に研究的と言いますか、こんなふうに誰か実験して、それについてこんな異論が出て、その後行き詰まって、研究史、科学史を紹介しながら授業されます。専門の数学の先生なんかは、やはり数学の美しさに、学生達を直接触れさせようという目的であまり色々細かい技術いうのは感じられませんね。基本的には板書して、それを学生が写したり、一緒に考えたりする事なんですが、途中でちょっと

こう黒板から離れられて、「皆さんここから何か感じられませんか」というふうに学生に問いかけされます。そして御自分では「本当にこれは綺麗ですね」、とかおっしゃるんですが、学生は判ってるのか、判んないのか。数学は理系の中では、独特だと思ってるんですが。河野先生いかがですか。

〔河野〕文系の学生には違う所があるんですよね。

〔藤岡〕うちの工学系っていうだけじゃなくって、冨谷先生は、随分やはり歴史的な背景というのでしょうか、後でお話しいただけると思いますが、そういう経過を追いながら、それが今の学問にどんなふうにつながってきているのか、同時に自分達の持ってた常識みたいなものを覆していくという様な授業をされておられます。川﨑先生、その辺は意識されておられるんですか。

〔川﨑〕そんな意識はしてないんですけれども、物事を考えるということが大切と思います。特に工学部の人間には是非とも必要なものですから。

〔冨谷〕ちょっとお伺いしたい事があります。70人の先生が授業参観の受け入れを申し出たわけですね。協力を申し出られた先生の授業というのは、それなりに工夫なさっている、ないしは悩んでおられると思うんですね。問題は大半の授業というものが、やはりそううまくはいっていない、ないしは、はっきり申して、面白くない、学生にとっても退屈な授業であって、マイナスの意味で評価せざるを得ない授業が大半だと思います。結局、大半のそれを無理やりに見せていただくということが出来ないのですけれども、いわば駄目な一つの例を我々は知りたい、これが一つですね。と言いますのは、当時私が学生の頃は教養部というのがありまして、教養部それから専門課程、そして大学院、私の場合一つとして面白い授業がなかった。ないし、そんな工夫なさっている先生が、本当にいるのかしらと思っていました。

〔藤岡〕よく授業出られたんですか先生。

〔冨谷〕ほとんど出てはいないです。ただ、工夫されたおもしろい授業というのはほとんど無かったっていうか、私は記憶にない。それがやはり今でも続いていると私は勝手に思っているのですけれど。この辺どうお考えになっているのかと、先に妙な水をかける様で申し訳ないのですけれども。

〔藤岡〕そうですね。先程、センター長さんの話にありました様に、私はとにかく赴任してきて、何がなんだか分からないと、雲を掴む様な話だと。そこでともかく大学の授業ってどういうのか見せて頂くというのが、正直な所ですね。それで70名というのは、実は私にとっては驚異的な数だったのです。多分そういうふうに言って見せて下さるのは、1名か2名位かなって実は思ってまして。大学の授業って所に一度触れてみるだけでいいやと思ってたんですが、そういう意味では驚きだったんです。誠実に授業改善を考えられておられる方とか、或いは一定程度の実績を持っておられる方、或いは情報が欲しいといわれる方がいたと思うんですね。で、それ以外の先生がじゃあ授業がまずいかと、そういう事じゃないと思うんです。人に見てもらうという事に対して壁があるという事もあるんでしょうから、残りは努力してないとは思わないです。ともかく、こういう動きが起こって、そしてそれが決して、何か外からどうのこうの、自分の授業について言うことじゃなくて、何か自分の授業を写す鏡になったり、それがきっかけで他の先生方とつながりができたり、情報が交換されたりというチャンスになれば、何かまた動きが広がるかな、まあ、そういうきっかけになればいいんじゃないかという事で、あまり良い授業、悪い授業っていう、そういう意識では取り組んじゃいないんですね。先生のおっしゃる通り、このデーターには片寄りがあるでしょう。ただこれを整理して、こんなふうに見せていただいた限りでは、こんな授業で、こんなふうな工夫されてますよ、ということが目にふれるだけで、何かその動きにつながらないかなという淡い期待はあります。

〔小田〕逆に殻を閉じられてしまうとこもありますね。先程そのニュアンスが石村先生の発言にあったというふうに私は理解したんですけどね。授業をどんどん面白くしてあげるんだ、みたいにとられてしまうのではないか。それは教育ってことを研究されている先生方にはマイナス効果であろう。とにかくポジティブなところから、いいもの、或いは活気のある所をどんどん広げていく。私も授業中、絶えず寝ている学生、気になるんですけれども、寝てる子よりも私語ですね。後ろの方で私語をやってる場合は、真ん中位の学生が、メールで、「先生注意して下さい」なんて言ってくるんです。僕は気づかなかった。君は気づいていた。君は授業聞けなかった。僕は気づかず夢中で講義していた。さりげなくちょっと言うんですけど。それからは、時々私語を注意するようにはなりましたが、それより何て言うんですかね、教室の中の雰囲気を、参加したがってる学生と、教官とのアクティビティーが相互交流しながら上げていくと、自然と目がくるんです。私語がやんで、その瞬間、自分の中でやっぱり「よしやったー」と思うんです。言葉で「俺を聞け」っていうのは簡単です。それは一瞬だけの効果です。やはりそれよりも、いいものでいざなってあげる。そういう方が進め方としてはちょっと、おしゃれなんだと。運動のコーチングも小出監督が高橋尚子をそういうふうにした様に、まさに今迄スパルタ式、軍隊式教育観、コーチング観が今や何か変わる気配を見せてます。

〔川﨑〕そうですね僕、自分が学生であればどうかなと思いながら授業しています。湯川秀樹先生は、まったく学生なんか見ずに、もうただただ、ぶつぶつつぶやいて書いたって言われてます。福井謙一先生も講義ノート見てザーと書いておられました。僕らまったく追い付けない位の早さで書かれて、そのうちに授業終ってましたからね。本当の学問的なレベルと、授業を学生にわかってもらうようにするというのは、ちょっと、こう、ずれてるというところが気になるんです。それは本当は一緒になるべきなんでしょうけど。そういう意味では、まあ学生の立場に立ってやってるつもりなんですけど。先程ご指摘がありました様に、特に専門では授業の途中から、レベルを上げて教えると学生が寝だしたり、興味を失うというのはあります。やはり当然ですけれど、新入学生にいままで、まったく聞いたことのない事を教えるわけですからね。しかも今の学生さんは予習はしてませんから、突然話が解らないとこに来たら嫌になるんでしょうね。でも、それは普通だと思います。

〔河野〕解らない事だらけですもんね。

〔冨谷〕それをあまりやさしく言うのは、先程申しました様に学問じゃなくお話しになってしまって。特に専門教育ではですね。だからそこは学生に克服して、やってもらわないと駄目だと思います。どうなんでしょうかね。それを面白くおかしくっていうのはちょっと私には出来ない。

〔藤岡〕その「面白おかしく」っていうのは、まあ出来ないとして、その学生にそういう、「努力して越えなきゃいけないんだよ」という事を何か気付かせるだとか、その気にさせるような何か働きかけとかありますか。

〔川﨑〕私の経験では、課題を与えて、今分からないけど家でやってきたら分かるように、来週迄に簡単なレポート出しなさいとか、授業の終り10分頃にレポート書かせて、授業でやったことの復習をちょっとさせてます。そういう、演習的な要素を入れています。私は京大の前、北大にいて、その前三重大学にいたんですけれど、そこでは、授業と演習１：１に対応させてました。授業でやった内容を同じ週の二日後の演習でやってたんです。演習も学生の誰かを選んで黒板に書かすというのではなくて、全員にノート持たせてそこに計算させ、先生が机の間をまわってノートをチェックする。それをさらに提出させて、次週までに採点して返すというふうにやってました。京大は学生さんが出来るという前提なんで、そういう事はカリキュラムに入ってない様ですけれど、僕はこれから要るんじゃないかなと思います。

〔藤岡〕それ先生、多いですね。河野先生も必ずレポートを返されるんですよね。

〔河野〕 2コマ続きで演習の時間は一応返していますが、普通の講義ではそうはいかないですね。

〔藤岡〕 学生の行動を伴わせる様にしてやっておられるのは、理系のかなり特徴かな、と思ってましたけれども。河野先生の方は、ちょっと文系の授業なので、それプラスこれは面白いんだよというメッセージをたくさん出したりしたんですね。これやるのは意味あるんだよと。

〔河野〕 まあ、その工夫したんですけどね。数学を文系の人にどう面白がらせるかというのはなかなか難しいんで、まあ僕としては、あまり役に立っているとかいう話しはしなかったですね。

〔藤岡〕 特にそうやらせる意味づけを、すごくしておられた様に思ったんですけれど。

〔河野〕 最終的に、やはりレベルが高いなあと思われる事をやってみせる場合は、これが将来的に役に立ちますよ、という言い方は、文系には出来ないんですよね。数学の場合は役に立つとかいう発想はないですから。理系の場合は、これは物理に使いますからとか、そういうのは一応言えますよね。文系に対しては、ちょっと言えないんで。出来る学生は納得しているんだ、というのは自己陶酔です。完璧にやってみせて、こういうふうにすると、パッと最後に綺麗な結果がでるというのを見せた時には、はっきりと自己陶酔と言いますか、出来る学生にはひたらせることができる。では、自己陶酔にならない人にどうするかというと、これ特に名案ない気がするんですね。僕の文系に対する一つの答えは、「役に立つ」じゃなくて、解く面白さを感じてもらうことです。課題与えて、時間内に解かすんですけど、どうしても解けない学生でも「どうしてもやる」という雰囲気で残ってまでやってますからね。それで解けたって喜んでますから。

〔冨谷〕 ちょっとお聞きします。全員に解らす必要が果たしてあるのかどうかという問題と、それから皆に面白かった、ないし充実感を持たせる必要が果たして大学の授業に必要なんでしょうか。

〔河野〕 それはやはり、大学のどの学年に対して、どういう内容かによって、違うんじゃないでしょうか。私はやはり大学の専門の授業というのを考えた時に、語学とか数学については、入学試験をしてる以上、原則、全員を解らせないといけないものだとは思うんです。それは教養と違いますから。

〔冨谷〕 そうしますとね、語学、数学という、いわば基礎的な共通の部分はそうせざるを得ない、そういうやり方をしなければならないんだという事をより徹底する方が効果的で、全員を解らせることができるのではないでしょうか。

〔河野〕 より効果的かどうかっていうのは難しいですね。また、そうするとすぐに必修という事が出てくる。実際、語学がそうですよね。で数学は必修という言葉は使ってませんが、ほとんど必修に近いですよね。そういう意味で、ただ必修という言葉を使ってそれを強制すればいいかというのは、ちょっと別問題だと思うんです。それからその時に、100%京都大学で何が何でもやるか、たてまえはともかくとしてですよ、現実に100%はやっぱりありえないと思う。じゃあ90%がいいか、80%がいいか。これはまた議論の余地がある事になると思いますね。そうすると、例えば数学を必修にしますと、どういうとこが実際問題と現実問題として悪いかといいますとですね、単位が甘くなるんです。はっきり言って解決法というのは単位を甘くする事なんです。で単位を甘い事に対する抑制効果っていうのは勉強の強制でしょうか。どなたがやらせるんですか。そういう側面を考慮されないと、単純に学生に対して必修ですよといいさえすれば済む問題ではないと思います。

〔藤岡〕 今の状態で先生の授業の単位修得率は何%位ですか。

〔河野〕私はかなりきつくて60%位。厳しいです。厳しいというより、結果的にそうなるんですけどね。意識的というよりも、自分で納得できて、この位だったら単位出してもいいという自分なりの納得でいくと、二回生はもっと厳しくなってしまうんですよね。一回生に対してあまりきつくやりすぎますと、やはり教え方が悪いんじゃないかな、という様な反省もあって、どうしてもちょっと甘めになりますよね。6割というのはきつい方なんですよね、実際は。

〔小田〕同じ事、感じますよね。体育スポーツ実習、運動科学の講義も、今までは京都大学は必修でしたから、講義に関する限りはレポートにしてました。ほとんど学生が単位をとれる形にして、でいて、もう一回再レポート書かせて、とにかく取れと。単位を取れという指導でしたから、甘いといえば甘かった。今度から自由科目の位置付けですから、私の運動科学でも3割は落ちてますよね。「先生の授業、ずっと熱心に聞いてたんですけど、落とされて、もう一回講義もがんばります」って連絡もよく頂くんですけど、そういうつながりが学生との間に出来て、緊張感が出てきて、かえって効果をあげてる。今まで落ちてる子、多いですけども、その効果たるや、今の方がいいというふうに僕は思ってます。

〔冨谷〕目的、やり方、内容によってそれぞれ違う点があると思います。例えば演習形式の授業というのは文科系では、野球に例えれば、1000本ノックみたいなもので、面白いとか面白くないとかいうことは論外だと。しなければならない、泣きながら。それを、「その授業を面白くしろ」ということは邪道だと思います。基礎練習はしんどいものだと、これをやらなければ山に登った楽しさはないよ、ということを、私は学生に、特に大学院の学生には強調しています。ただ、そうでない形の、例えば講義形式の授業というのは、難しく、いわば専門的なことしても、仕方ないものですから、使い分けをしなければならない、と思っています。ならば、例えば3回生から大学院までいるような、その授業では、どうしたらよいのか。皆がある程度解りやすい授業をめざさなければならないのか、そこに迷いがあるのです。

〔藤岡〕先程、小田先生が教養の講義というのと学問的レベルを維持しようとしてやる講義とは違う、とおっしゃっておられた事と通じますよね。

〔小田〕教養科目を担当して、専門科目、大学院科目も担当してますので、自分の中でこんがらがる時もあります。「これじゃ専門科目の延長だなあ」と思って、教養科目をどうしたらいいかも考えましたし、逆に「これじゃ教養科目だなあ」と思って専門性をもっと、どう打ち出すかと、絶えずこの数年強いられてきました。その仕分けとそれぞれの目的、価値が芽生えざるを得ないですし、それを、それぞれの授業に同じ学生が出てますし、そういう子から感想なんか聞きますと、「先生そんな話もやるんですね」なんて言ってくれたりすると、「少し自分も多少なりとも変わってこれてるかな」というような思いがあります。

〔藤岡〕先生のお話。あれですよね。ようするに、程度をめぐってという話じゃなくって価値の問題なんですね。

〔小田〕価値でせまってるんです。「学問レベルを低くするのは教養」というのは、学生に失礼だと思いますし、それが授業をつまらなくする。私の体育論、技術論、スポーツ「チームか個人か」。それとどう関わるかという自分のフィロソフィーを学生に伝える。伝え方の持っていき方は、授業の専門の場、と教養課程の場、と違っていかなきゃいけないのだな、と思いつつあるんですけど、学生には私自身を語るしかない。

〔藤岡〕フィロソフィーは同じでそれを伝えていく伝え方が違う。

〔小田〕伝え方、教材は違いますね。専門の論文を英語で持っていくのは、ほとんど大学院の授業ですし、その中でも、学部生が上がってきてくれていると、そういうつながりの中で、小田先生の授業には専門の英語の論文のオ

プションもある、ということは、お腹の中で受け取ってくれてるようです。教養課程と大学の学部と大学院とこの3つ持たされて忙しいなと一時思いました。その忙しさの中で、今は楽しさを教官が味わえておれば、学生には何かアクティビティが生まれてくるのではないか、という事もあるんじゃないかなと。でいい意味で、手を抜きますしね。学生にやってもらったり。そして学生が育ちますし。だんだん、いい手の抜き方ができるんですが、それは、あまり気負いすぎてやろうとしてて、失敗してた時代もあったからなんです。

〔川﨑〕学部授業でそのように講義をしてみると、他の学生に結構火がつきます。あの子はここまで勉強しているから、俺も何かを始めなきゃいけない、と思うようです。

〔藤岡〕薬学部に「科学英語」という授業がありまして、それを先月に見せていただいたんですが、学生が自分で学会発表のミニ版みたいなのをやるという、そういうふうにして科学英語を身につけていくんですね。で、ちょっとしたレポート、立派なレポートなんですが、専門的な内容について、それを発表、10分弱発表する。聞いている学生は、それに対して質問しなくちゃいけない。誰が質問に指名されるかは教師の裁量ですね。皆聞いているんですけど、そういう様な組み合わせをすることによって、学生が動いて、学生が力つけてくるみたいなことは可能なんだなと。今先生の話の中で思い出したんですが、先生そういうのはどうでしょう。

〔川﨑〕それは例えば化学系ですと、学生実験において今年から取り入れてます。実験してレポート書くのだけではなくって、二か月に一回、クラスで発表させて、質問を先生方がおこないます。

〔小田〕私もよく分からないというか、どうしたらいいのかわからない。例えば話はそれてしまいますけれど、二年前のベストセラーに「最終講義」という本がありました。丸山真男、大塚久雄、それから貝塚茂樹。そのあたりの最終講義です。私も買って読んだんですけど、こんな事学生に話して、本当に学生が面白い、ないし理解して充実した授業を受けたと思うのでしょうか。まず最初にそれが私の戸惑いなんですね。丁度西田幾太郎の授業がこうだとか、河上肇の授業がこうだった、とかよく言われておりますけれども。最終講義の本を読んでまして、学問のレベルというか、そして、おそらく学生の事などひとつも考えてないと、こう思うんですね。それを、良い授業だ、と思う人間が、学生が出てくる。それは一つの価値とみて、それをよしとみて、素晴らしい授業であったという、その授業のとらえ方。しかし一方では、そうでない局面もある。どちらが理想的な授業であったか、ということに対して、私は少し解決出来ないといいますか、私はよく分からないと思いますね。自分の授業の中でよく私言ってました。どっちも必要なのじゃないかと。学生の3分の1は何だかうずうずして、行き先決まらないで、自殺も典型的に多いですし。それは先生が元気がないという事でして、意味不明な授業だとか、何言ってるのか分からない、その先生が何と教えたのか分からない、こんな立派な本書いてる先生なのに授業受けたら失望したとか。それで学生が大学に来なくなって。まだバイトして元気だったらいいですよ。バイトで元気になって、授業なんか出てこないのに、ちゃっかり単位取るのが3分の1。後の3分の1が医学部、法学部に多いような、目的志向型で試験対策の勉強をしている。残りの3分の1の、何したらいいのか分からない。この原因は先生の中にもかなりある。湯川秀樹先生の話しをしましたけど、まったく学生が理解しなくても、理解できなくても、学生のことなんか、何も考えてくれてないようなのが、それが魅力で、そういう魅力で引っぱっている。とにかく何か元気があれば、何か分からなくても「面白いで」というのもなきゃいけないんだと。そういうのについて行く人もいるんですよね。それはついて行けない人もいるんで、こんなめちゃくちゃ分かりやすい、こんなとらえ方もあったのか、というように、湯川秀樹を解説してみせる先生だっているわけですよね。そういう総合的ないろんなメニューがあって、学生が自分で感性をかき立てて、そういうのでないと、きっと総合大学はうまくいかないだろう。

〔藤岡〕ある数学の先生の授業は、さっきもちょっと紹介したようにですね、入ってきていきなり板書して、機械の様に板書し続けるわけですよね。誰も寝ないんですよ。一人学生が遅れて入ってきて、それはほとんどやる気無いみたいでしたけど。60人ぐらい居ましたかね。誰も寝ない。終ってから、僕は書くのにもう腕が痛くなるぐらい

書いたんですけど、中身はわからない。隣の子に聞いたら「分かりません」。「それでどうするの」って言ったら、「帰って何度も何度も復習します」って。それ聞いた時にですね、何か一生懸命、手を取り足を取り導くことはないんだ。学生が火つけばいいんだな、と思ったんです。今日、八木先生がお見えになったら是非お話し頂きたいことで、川上肇の学説とイギリスの古典派経済学の関係とかいうことに触れたら、学生がパーと顔を上げるんですよ。こんな、ある意味ではちょっと難しいようなとこですよね。そこで顔を上げるという事は、やっぱり何かこう重要らしい所と言うのを、学生っていうのは、直感的に分かっているのかなって、そんな気もしましたね。

〔川崎〕私は文系の先生に伺いたいのですけれど、先程の御質問はやっぱり大学をどう見るかだと思うんですよね。大学学部を学問する所と見るのか、ビジネススクールのようにトレーニングをする所と見るのか。大学院を学問する所とすると、今の大学はビジネススクール的な基礎知識を教え込むと見るのかどうかです。大学は学問するという所である、というのは殆どの皆さんが了解しておられたことだと思うんです。しかし、最近は、どうも社会的な要請はそうではなくって、ビジネススクールの様な、マネージメントスクールの様な要素を入れてほしいように世間は思っているんじゃないでしょうか。こういうふうな会を持つ事、そのものも、やはりそれに対応してるように、私には思えるわけです。つまり、「学生が分からなくってもいいじゃないか」、「情熱さえ伝えればいいじゃないか」、と言うんだったら、自分の専門知識を目一杯教えていればいいわけですけど、それでは残念ながら学生の人はついて来ていない、というのが現状なんで、それがどうも、私には授業をどうしていいか分からない最大の理由なんです。どうなんですかね。

〔河野〕私は経済の学生の専門を教えるって感じではないので、ちょっと分からないですけども、今迄いろんな系列っていうか、今おっしゃった、学生に対してどう接しているかっていうのは一概に捉えられないとこがあって、文系の方でも実学志向の方おられますし、法律と経済、わりかし先生がビジネススクールみたいな感覚もありますんで、そこんところは、うまく対応できている。但し、対応の統一の方向が見えてこないので、それで勝手にバラバラに努力しているような印象はありますね。

〔冨谷〕私の場合は実用的な実学とは少し違うのですが、確かにおっしゃっるとおりに、学生の思考というものが、分からない。果たして実用的な、実学的なことだけを志向しているのか、それともより基礎的な、といいますか、非実用的な環境といってしまっていいかもしれませんけれども、そういった方法を学生が、特に最近の学生が志向しているか、ということがつかめないのです。物の考え方だとか、哲学的な志向だとか、それから歴史的なものの見方だとか、物を考えるだとか、そういった方法を、私は学生にトレーニングしたいのですが、それを志向しているのか、それとも学生の方は、むしろ役に立たない、ないしはそれは無意味だと考えているのか。そこに一番の戸惑いがあるのかもしれない。

〔小田〕私が昨年、慶応義塾大学藤沢キャンパスに行って、授業評価というプロジェクトの一員として、そこに行ってきて、たえず学生との応答を繰り返して、レポートや学生の動向をつかみながら、授業を進めておられる風景に接して、それをさっそく今年から、メールで授業の感想なり、今日のテーマに対しての意見なりを求めて、それに対するレスポンスで来週は始めるよ、というような形をとっています。それを藤沢キャンパスは、毎週のようにやってる授業がある。それは到底出来ませんから、合間に一回だけやって、そして今度、試験の時にまたやろうと思っています。そういう中で、何か学生の応答を掴みたいな、と私自身、現時点でやっている。スポーツ科学の知識は、多くの全国の大学でやっていると思います。専門のスポーツ関係のトレーナーとか、そういうコーチを育てる専門学校でも教えてる。そういうものの内容と、物の考え方というものを教えたいと思うし、そういう、スポーツ科学だけで現われるもので運動というものを見てて、どういうメリットとデメリットがあり、デメリットとメリットをどう捕えるかというものを、自分の中でコーチをしながら、授業をしながら、それを学生の前でさらけ出していく。学生はそれにすごく反応がいい。そういう授業を初めて聞いた。で、反応を見ながらこの数年きてるんです。先生も、そういう、何か反応を見るようなことなさっておられると思うんです。いかがですか。それの上で掴みきれて

ないとおっしゃっているのか。

〔冨谷〕あまりしてないのです。と言いますのは、それこそ学生の何らかの反応と言いますか、学生に聞いても、あまり否定的な反応が無いのですね。何らかの回答を寄せてくる、ないしは、反応をする学生は、必ずいい反応をするに決まってると、私はそう思ってますので。したがって、悪い反応、ないしは、こちらに対する否定的な意見というものを知る手段が見つからないので、アンケートをとったりしないのです。義理で答える意見は、あまり役に立ちません。

〔藤岡〕何人ぐらいですか。

〔冨谷〕60ですね。

〔藤岡〕文学部の方はどうですか。

〔冨谷〕文学部の場合は演習形式です。これは先程ちょっと言いました基礎トレーニングで専門の千本ノックです。

〔藤岡〕法学部の60人と言いますと、かなり専門的内容ですから、登録している学生は300人ぐらいでしょうか。

〔冨谷〕何とも言えません。と言いますのは、まず受講登録というのはしません。果たして興味があるかどうか、時間が空いているので埋めたのかもしれませんし。

〔藤岡〕その評価、先生のアンケートなりは、評価対象にしないということを言っておられますか。

〔冨谷〕いや、そこまでは。

〔河野〕それだって学生はいい事しか書きませんわね。お世辞ばっかり並べます。本当に歯の浮くような。

〔冨谷〕書けと言ったとしても、ひとつ駄目ですね。

〔小田〕結構、私にはいろんな事書いてくれまして、ドキッとするようなもの、「先生あの先はさっぱり分からなかったから、もうやめてくれ」とか「文系の学生がいるんだから、θって聞いただけでゾゾッとするんだ」とか。半分冗談かもしれないけども「ビデオが20分以上は長い」とか。それから色々ありましたですよ。メールに対してのレスポンスについては、こういうのがあります。もう僕は心臓が止まりそうでした。「絶対今日の一言、先生のやり方で、多くの学生は、もう先生にメールでレスポンスするのやめようと思ったはずです」。そんなにナイーブなんかな。こっそり僕と交流したいのであって、それを公にして、ましてや授業でとりあげるんなら、それは匿名でやって下さい、とか。そこの場で直接やり取りしたかったから、私は、どこに居るの、手上げてって、やったんです。もうちょっと聞きたい事もあったんです。メールだけじゃ分かりませんでしょ。その動きなんて、いつ経験したの、どういう事があったの、顧問はどんなふうに教えてくれたの、とか。それを題材につかみながら入りたかったのですが、もう凍ってしまって失敗した。大失敗。

〔川崎〕冨谷先生のおっしゃるように、学生はなかなか本音を言ってくれないし。

〔小田〕本音として、かなりきつい事思ってるんじゃないか。というのは、例えばリレー講義みたいに先生が多いと気楽に言えるんですね。１人ですと対象がはっきりわかっちゃいますから。で、実際に総合人間学部でリレー講

義をやってるんですけども、その第一回のアンケートっていうのは、相当強烈ですね。二回目、三回目になるにしたがって、あんまり、いい事ないし悪い事も減っていく。第一回目については、期待も大きかったということもあるから、それによって、非常に満足したという学生と、正反対の事を書く学生と見事に分かれて、ちょっと世話した人が動揺したぐらい、きつい事書いてるんですね。今さっきおっしゃったような授業、こういうこと、欠点を直せば良くなる、というような指摘ではなくて、本当に破壊的な意見ありますか。

〔河野〕僕の場合は、書いてきたんは、文系のレベル知ってるのか、という感じのこと。たえず僕も気にはしてるんです。やはり文系の数学のレベルを知らないで教えてるんじゃないかっていうこと。逆に、よく出来る学生はやはり京大に来て、さすがに京大だと思うんです。要するに、僕は妥協しないでやってる、という事を認めてる学生はいたんです。もともと文系だからといってレベルを下げないようにという気持ちは持っていて、それを分かっている学生には言っています。

〔石村〕先生の授業、今たまたま話題に出ましたけど、今、先生が教えてる数学と高校の時の数学との関連性とか、高校の数学はここまでやってって言うことを示されたり、教科書をよく調べておられますよね。

〔河野〕まだまだ不十分なんです。一応高校の課程が変わったりした時には調べてるんですが。実際の学生自身は、そういう改革があろうとなかろうと、本人自身は、習ったり習ってなかったりします。一様に共通なことしか押さえてないんです。だから文系の学生にとって、普通の京大の理系の教官が、理系に教えるような感じで講義されても、やはり自分達のレベルのことを押さえてないと思うてるんです。

〔藤岡〕分かってくれてると思うんですよね。学生は。

〔河野〕分かってくれてるというよりも、知らないんじゃないかと最初から疑ってます。

〔藤岡〕学生に聞いてみると、大学に入ってえらい疎外感を感じるというんですね。担任もない。クラスも無いから。

〔河野〕クラスはありますよ。

〔藤岡〕あるけれども、語学の時に会うぐらいで、ほとんど無いと同じでしょう。

〔河野〕クラスを無くさないでくれ、という希望は結構多くて、もしあれも無くなったら、本当に広い学内にほっぽり出されてしまいます。

〔小田〕高校時代っていうのは、のべつくまなくクラス単位で動いていましたから。それがポーンと環境が変わって、ある学生はバイトで自己実現をとげたり、クラブ活動、サークル活動で自己実現をしたりしますけど、大学の授業の中でどうも自分というものを見失ってしまう環境があるんですね。それには、何かどっかの教官で、はまってほしいです。一人でいいですから。この人に「自分は教えてもらった」とか。この人は、「訳分からないけど、なんか凄い」とか。この人は「ひどい授業するけど、何でこの人が教授なのかは、分かる気がする」とか。何でもいいですけど。そんな話しを僕はやっちゃってるもんですから、学生に。世の中って、そんなとこやで、と。大学はもうそのままの相似形だ、と。てんでばらばら、いろんな人がいて、そういうとこ、高校時代には無かった所、それでいい教育効果をうまくもたらす。バラバラであったり、そこを無理して形づけていくと、かえって不自然ですし、何かその証明出来ないですかね、いろんな先生が居る中での教育効果。

〔河野〕だから、それが見えてこないのが京大だと。また8月の末の大津プリンスホテルですか、あそこで「京都大学の教育を考える」というので、そこでも出るんですけども、そういう統一が無いのが京大らしい、と言ってしまえばそうなんですが、いつまで続けられるのか、どうかって問題がある。学生から見た場合、一人でもいい先生が居て、その先生が居るから、大学に来てるかいがあったと思ってくれる学生はいいんですよ。それで、全員がよければいいのですが、実際、それは不可能ですからね。

〔藤岡〕不可能ですね。

〔河野〕だから、学生は、悪いほうを見てもらって、大学っていうのはこんなもんだ、というふうにしてしまう。そういう手だてっていうのは、なかなか無いでしょ、大学側から見て。確かに、学生の中には、苦手なとこだけに着目して、全否定してしまうようなのがたまに居るような感じがありますね。そんな学生に対する手だてっていうのが、ちょっと見当たらないで、かと言ってそれを、徹底的に面倒をみることはやっぱり出来ないし、すべきでないと思いますので、そういう所はやっぱり問題かなと。

〔藤岡〕そういうのは、学生の生活の変化と社会の変化の中で学生が置かれてる状況から出てまして、授業そのもので本当になんか対応できることなのか、というのは私達、授業改善ってことをやってるわけですから、自己否定みたいになっちゃうんですが、果たして授業の問題って言うのは、どこまで今の大学の問題に対して迫れるんだろうかというあたりはいかがでしょうか。

〔川﨑〕もう少し時間や余裕があれば、授業評価なり、授業の工夫は出来るんじゃないかな、という印象は持ってます。大学を教育機関と見るならば、教育熱心にする人が良い先生です。しかし、今は大学は研究機関と見てるわけですね。つまり教育は二番目なんですよ。だから、なかなか、教育改善は進まないんです。エバリュエイーションのシステムを変えてもらわない限りは、教育改善に関して私は非常に否定的です。私は教育が必要だと思うからこそ、ここにも出てきて、授業にフィードバックしようと思ってるんです。社会は教育を要求しているんだろうと思っているわけです。しかし、どうでしょうか。ほとんどの京都大学の先生方はそうは思っておられないんじゃないでしょうか。

〔河野〕ちょっと今のお話しなんですけれど、学生が大学院生とすると、大学院の教員というのは研究者であっていいわけですね。

〔川﨑〕それはそうです。

〔河野〕だからおっしゃっている教育と言うのは、むしろ学部の学生の、しかも基礎的な教育のことですね。

〔川﨑〕高校から大学へ来た初めのときに、そこでつまずかないように何とかしたいわけなんです。大学院生は大学院に来るという意志を持って来ていますから、研究するという意志で来てますから、おっしゃったように、泣いてでも何とでもやってもらうわけです。でも、学部はそうはいかない。

〔小田〕私はそこをターゲットに考えてるんです。教育と研究、分けようと思えば分けられます。例えば、本当にハードなトレーニングをやって勝つ時の、その勝つ監督なりコーチのフィロソフィーと人間性、それには深い、広いものがあるんですよね。それにひかれて、多くの選手がついてゆくことがありまして、その理論にひかれてるのか、その人間性にひかれてるのか、それが本人達もわからない。あとあと考えてみると、結局無茶苦茶な、ほんまに軍隊的なトレーニングだと。しかし、そこには監督からにじみ出るものがあるっていうことが、スポーツにはある。このように、研究の先端レベルにいってる人しかできない、研究型の大学の教育とはこうだ、というものを京

大が示さなくて、どこが示すんだと思います。

〔藤岡〕それは基礎から学部教育も含んでですか。

〔小田〕トータル。そこから生まれてくる博士号を持った人達が将来、職業的に何をなしとげるかということです。本当に、その辺の所がないと、教育と研究を切り離してしまう。教育と研究はいかにもズレてますけれど、底通していなければいけないと思います。底で通じていれば、なるほど先生方の授業そのものを感じることができる。感じる世界ですから。そういうものが、本当に、にじみ出るような先生が、どんどん京大の中で育っていく。そういう大学でありたいと思います。

〔藤岡〕私は、記録を取りながら整理してみて最後に感じたのは、京大の教育は全部、教養教育である。ものすごい教養教育を、全学で、あっちでもこっちでもやってるんだな、というのを感じたのです。

〔小田〕そのエネルギーが自分を支えてます。私自身も迷いがありました。システムが教育を評価して、人事なんかでも、教育の業績を上げないと、教育ってことに本当に人はいかないのかな、と。しかし、オリンピックなんかも、メダル貰って、そこに100万円とか宝石付けないと本当にメダル取れないのかな、という議論と同じだなと思いました。それをやっていくと国家はつぶれますし、その選手も将来的にドーピングやなんやかで皆つぶれてる。本当に残るのは、純粋なこころの世界。本当にスポーツを純粋に愛して、それを0,01秒の100分の１秒に自分の人生をかける。ただ、それだけ。何の他に目的もない。そこにオリンピックがたまたまあって、金メダルをとれるということです。本人は本当に綺麗な純粋な世界です。

〔河野〕私は学問っていうのは、そういうもんだったと思います。それが最近では、どうしても社会の要請によって、どうのこうの、ということになる。その時に評価する必要が出てくるわけですね。京都大学に限って考えた時に、教育というのが非常にハッピーでおれるのは、量的に評価を考えた時に教官が少ないと思うべきか、学生が多いと思うべきか、どちらかなんですよ。大学院化が進んでいますから今は、かなり踏み込んだことが出来るんですね。例えば、京都大学で学生は多すぎるじゃないかと。教官は足りないじゃないかとおっしゃるならば、学部学生はゼロでもいいんですよ。だから、今、従来の大学の枠内でどうこうと言って、それで無理だからどうこう言うことではなくて、大学みずから、こうする、すべきだ、という提案は出来るんですよね。しないと、大学に対して責任っていうのは、また問われるんです。京都大学で言うならば、学部の特に一、二回生の教育は負担だと思う。一、二回生はいらない、三回生から取る、ということは可能なんです。提案は出来るんです。京都大学の意志として出来る。不可能ではないです。そこまで踏まえた議論を、京都大学の教官だとやらない。どうどうめぐりのどうしようもない状態というふうになりかねない、と僕は思うんです。

〔小田〕フランスのラグビーがずっとイギリスに勝てない時に、一時イギリスに勝つ為に、スパルタ訓練をして、選手を酷使して、ますます勝てなくなった時代があったのですけど、三好先生から聞いた話ですけど、フランスが気付いたことは、芝生を植える、子供達に遊ばせる、そして、その楽しみをもって、本当にナショナルプレーヤーになりたい人にきびしい練習を課していった。それで今フランスは５ヶ国対抗の中でトップですし、南半球のオーストラリア、ニュージーランド、それに世界のトップにいるのが、今フランス。そういうように、一回生が入って、豊かな大学、楽しさ、面白さ、「なんや分からんぞ」と「これはやってみる価値あるぞ」。そういう思いも無いのに、遊びを知らないのに、いきなりスパルタでやられて、大学院教育までやってた人が、博士号は取るけど、本当に伸びるでしょうか。またそういう先生が教授になって同じこと繰り返す。そういうことになりますよね。本当に学問って楽しい、面白い高度教養教育っていうのを、はき違えたらいけないと思います。何か専門を教えていれば高度といいますけれども、そうやなくて、本当にそういう楽しさ、面白さ、そういうものを、何かそう感じさせてくださる先生、或いは感じてる先生に触れることが出来る環境、いろんな領域でいろんな人がいて、道で会っても「先生」

って話が出来たり、飯食いながらでも。将来的にはそうなったらいいな、と思います。楽しい大学ができたらいいなと。そういうアカデミックな雰囲気の中で、人間も自然と人間性を涵養できる。そういうことが本来の教育を研究をする為にどうしても必要です。実はもっと京大には、研究アクティビィティ、或いはプロダクティビィティがあると思うのです。上がらないのは、そのたたき方が足りないって言い方もあるけれども、学生を幻滅させてつぶしてることの方が多い。そういうふうに思うのですけれど。

〔冨谷〕昔は研究者の生き様を見せることが教育になった、とおそらく皆が思い、そしてやってきたことだと思います。だからこそ、分からないことを言ったとしても、分からないことが満足につながり、面白くない授業でも、何かそこに、偉い学者のように思えるという、そういう研究者の生き様を見せることが学問だと思われてきた。やがてそれが問題になりつつあるのか、それともそれはそれでいいのだと、伝統的な、いわば研究・学問というものを主体とする大学はそうあらなければならないんだと考えられているのか。これは私、どちらなのかよく分からないのです。教育と研究という、この二つをどう考えるのかということに、このことは、結びついていくものだと、個人的には思っています。

〔石村〕今の件なんですけれども、授業を見せていただいてる時には、学生が乗り出してきたり、乗ってるっていうのは、先生の生き様であるとか、先生がどう研究されたのか、どこを苦労されて、どこで突破出来たのかっていう話の時で、教室の雰囲気もいいんですよね。冨谷先生の所でも、「ここのとこ、実は間違いがありました」っていう所から見せていただいたんですが、「先生、どこを間違ったんやろ」と、学生の興味をひきつけていらっしゃいました。うまいこと「先生の思考過程」を出した時の方が、学生も乗ってきて、評判もいいっていう感触を持ってるんです。小田先生の言葉で言うと「生き様を見せる」それでいいのだっていう所が、まだ京大の、少なくとも今見せていただいた中では、かなり有効ではないのかな、学生達にとっては。河野先生の授業でも、これは「こうこうこうなんですよ、こういう事にしといて下さい」っていう時のほうが、説明式の時よりもなんか全般的に乗ってるように、僕達には見えたんですけれど。

〔河野〕正直言いまして、これ僕だけかもしれませんけど、ある程度学生の前では演技してるわけですよね。生きざまを見せろって言われてもねえ。

〔小田〕僕は心の中で万年助手になりました。僕より四つも若い人が助教授で他から来て、僕追い越されました。それでとうとう悩んでラグビーの監督辞めました。辞めたら今度はまた違うふうに見えてきました。もう本当に、あれ語るのに何年かかったんでしょうね。最初は声が上ずってました。そんな事言っちゃっていいんだろうか。でも学生は「先生ありがとう」とか色々言ってくれた。ひびいてない子にはひびいてないし、ひびく子にはひびくんだということも分かった。この間同じ事言ってもひびかない子が、今週は、ひびいてる場合もある。

〔河野〕それはやっぱりすべての学生じゃなくて、中にはそういうのは結構だとはっきりいう学生もいるでしょう。だから、教育にオールマイティていうのはなくて、一定の演技が必要になっているのは、やっぱりそうだと思いますね。

〔小田〕なんでも生のもの出して食えっていっても、やっぱり料理しなきゃいけませんからね。でも、自分の体験を真心で語れば通じると思っている。

〔冨谷〕従来の、いわば大学の先生的な講義というものは、それでいいのか、という問題があります。その次は、京都大学の学生の教育、かつてはそれがうまく出来たと思うのか。かつては駄目だったからこうなったのか。こういう事は我々も考えていかなくてはならないのです。高等教育センターでこういう形で取り上げざるを得ない、ないしはそれが必要であると、私は思うのですが、やはり、かつての様な事では駄目で、何らかの改善をしていかな

ければならないということなのですかね。

〔藤岡〕高等教育教授システム開発センターが、何をしていったらいいのだろうか、ですね。FD、これは何かをしようと言う、だけど動きがない。その動きという可能性が、あるのか。或いはそこで、こういう私達のプロジェクトが、どういう役割を果たせるのであろうかということが、実は暗中模索しているところなんですが、それについてちょっと御意見聞かせていただけますか。私達は今、授業っていう所に光をあてて、そこからいろんな動きをキャッチして返していくという形で授業改革、大学改革の何か、そういう動きを作りたいとは思ってるんです。が、やはり最後は、FDっていいますか、学部だとか学科だとか、そういうとこで、教育に直接携わっている人達どうしの改善ってことが本筋だと思うんですが。

〔川﨑〕私達教官が飲み会なんかで話しする内容は、学生の教育の事なんです。どうしたらいいんだろうという。だから非常に危機感を持っているのに間違いありません。私は物理化学という分野の30人程の先生方の世話役をしてるんですけれど、喧々囂囂で二時間、三時間位集まって会議やるわけですね。私達は危機意識を非常に持っております。だから何とかしたい。でも先程からおっしゃっているように、どうしていいかよく分からないのが現状なんです。それで答えになったでしょうかね。だからどうしてほしい、というのは無いんですよ。どうしたらいいのか、聞きたい、知りたい、是非教えてほしい、と言うのが私達のセンターへのお願いです。

〔藤岡〕世界的なスタンダードとの関係もあるんですか。

〔川﨑〕それは、実はあまりインフォメーションが来ないから、一般の先生はほとんど知りません。そういうふうじゃなくって、むしろ私達は、我々の学生に対する意識は、教育機関だと思っているわけです。特に工学部の人は、出ていってもらった学生さんが社会的にどういう評価受けるか、ものすごく気にしている訳です。それは我々自身の評価に100%跳ね返って来ますから。したがって、良い学生にして卒業させてあげたいという意識がものすごく強いわけです。

〔藤岡〕学生が悪くなっているというのは、他から言われてるんですか。

〔川﨑〕それはですね、客観的なとこは入学試験の点数です。二番目の客観的データーとしては、例えば昔の学生ですと、就職の時に、一社受ければもう必ず合格したんですよ。ところが今は、もう三社か四社受けないととおらないんですよ。これは、はっきりですね、レベルが低下してることを意味してるんです。どうしたらいいんだろうと言うわけですね。それから三つ目にそういうテクニカルな問題ではなくって、京都大学というと昔からの「のれん」がありますから、学生さんが社会に出たら、社会を指導していく立場になる確率は高い訳です。そういう人がいい加減な知識を持って出てもらっては困る、と言う社会に対する責任も、私達は感じてるわけですよ。

〔藤岡〕感じ始めたんですか。それとも、昔から感じられていて教育をしておられたのでしょうか。

〔川﨑〕四年前に北大から戻ってきたので昔のことはよく分からないのですけれど、たぶんこの10年とか5年そんなところで感じてきているのじゃないでしょうか。

〔冨谷〕ちょっと、お伺いしたいのですけれども、今おっしゃった工学部の問題でもそうですが、学生の学力の低下というものは、それを低下とみなすのか、それとも、そうではないと認識されているのでしょうか。京都大学の中でも、京都大学のレベル、学生のレベルの低下、というものが言われている。例えば先ほどの工学部の就職の問題、その他の社会に出る問題、の他のいくつかの問題というものにかかわって、いろんな見方がでてくるのではないでしょうか。

〔石村〕世間に言われている学力低下というのは、おもに学力の内容の問題だと思うんですね。それが高校と大学とでつながっているとか、つながっていないとかいう形でよく説かれている。ただ学生達に対する調査をいくつかしてみたんですが、たぶん内容面よりは、方略面、learning strategy と言うんですけれど、どうやって勉強するのか、学んでいくのかって言う点ですね。そしてもう一つ、それ以前に「なぜ学ぶのか」っていう意欲であるとか、態度であるとかいう所が問題なのではないかと考えています。必ずしもコンテンツの問題だけではない、内容だけの問題だけではない、っていうふうに考えて対応していくのが必要ではないかと。よく理系の先生から、入学試験の点であるとか、先生方によっては同じ試験を毎年やっておられて、その点が下がってきてるんだ、って言い方で言われる面は確かにあるのだけれども、その面だけではおそらくないであろう、と考えて対応しています。たぶん学生達にとっては、それ以上に、なぜ学ぶのか、なぜ学ばなければいけないのか、って言う意欲であるとか、そちらのほうの問題がより深刻ではないのか、と考えています。

〔冨谷〕学生自体の自覚はあるのでしょうか。

〔河野〕自覚って言うか、それについては、あんまり学生は思ってないと思いますね。

〔小田〕試験、面接で今日の学生の子をみますと、高校時代の成績が、進学校であっても、トップじゃない場合が多いですね。いわゆる上から100人の次の子達も、結構京大っていうのは入れる大学ですね。これはどうなんでしょうね。

〔河野〕単純に統計的に何%か落ちてるのは明らかで、いわゆるペーパーテストの点を検討すれば、学生の学力が落ちているのは明らかなんですよね。それに対して、京大の、あるいは東大は、上から勘定できると言われている。定員は殆ど変わらないのですよ。ところが、絶対数は何割か減っているんですよね。ということは、どこまで入るかっていうのは、昔はここら辺りまでしか入れなかったのが、もうちょっと下がるとこまで入れる、って言うようになっているということは事実だと思いますね。

〔石村〕たぶん、その部分が入ってくることによって、先程の意欲、なぜ京大に来たのか、の、「なぜ」ということを生じてきているようなんです。

〔河野〕ただ、よく言われることとしまして、学生の学力と言うものは、特に学生に大学に入ってから後のことは、これはもう学力に入らないので、語学と数学。それはやはり、かけてる時間に比べての問題だと思うのですね。語学力でいきますと、旧制高等学校出身者と比べて、我々も圧倒的に落ちてることは明らかですね。かけてる時間が全然違いますもんで、やっぱり語学の能力、落ちたんでしょう。但し、旧制の時代に、学問って言った時に、何をさしてるかと。範囲が狭いですし、語学というのが中心になっていたと思いますし、全然違います。だから、単純にレベルが落ちている、と言う表現が当を得てるかどうかはちょっとわかりません。

〔藤岡〕昔の学生が、ここで勉強すればこうなる、というイメージを描けて勉強をがんばろう、というような、そういうような文脈の中で学んでいるということと、今の学生の動機とは全然違いますよね。そうすると、学力というものを、測定された結果だけでは議論出来なくて、そういう「学ぶことの意味」だとか、「意欲」だとか、「世界でやっていく見通し」だとか、そういうものといっしょに考えていかなければならない。授業ってものが、そういう面では光を与えうるのではないか。やっぱりそこに光をあてて、授業で何がおこっているのかを掘り起こすことが必要だと思います。そうしないと、いわゆる生きて働く学力はつけられない。

〔冨谷〕学力の低下の中には二つあります。一つは、いわば、物を考える力が無くなってきた、ということを、学力の低下という。それから、根本的な知識を知らない、という学力の低下。我々は、授業をやっている時に、どう

してもその二つを考えていかなければならないと思います。知識の低下というか、根本的な常識というか、知識のばらつきと言いますか、これは例えば歴史にしても、京大はこの頃、六年一貫教育の高校出身者が大変増えている。そうすると、始めから、例えば地理はしないとか、歴史はしない、というそういう形で入ってくる。かたや、それを「専門」的に選択していたりする者がいます。それで大変ばらつきが出てきていることも確かで、そういった状態の教室の中で、ある学生には、中学レベルのことから教えなければならない。それと同時に、物を考える力と言うものが落ちてきている。確かに言えることは、前者の基本的な知識というか、最低の知識と言うか、その方面についてはやはり選択性があまりにも進んだために、大変ばらつきが出てきているのではないかと私は思うのです。

〔河野〕公式を知らないではどうしようもないようなことを前提として、パッと授業をして、全然ついていけない、っていったことになると、その公式を、どうしても、どっかで覚えてもらわないと困るということがありますね。逆に公式さえ覚えておけばいいかというと、御存知の様に、推論ですから、いわゆる学力上の知力みたいなもんですね。それが無いことには、どうしようもない。こういう場合、両方共落ちてしまうという感じがやはりある。大学迄行ける、と言うことの多様性をやはり認めすぎたことかな、という考え、しないでもないですね。初等教育の反省迄さかのぼらないと、大学の教育の今のレベルって言うのはなかなか論じられない。大学の立場から、一方的にそういうこと言うと問題だと思いますし、なぜ高等学校が総合教育、総合科目っていうのをやらざるを得なくなってきたか、というのは、昔の様に、一律にここまでこういうレベルですよ、というのが出来なくなったんだと思うのです。

〔小田〕私思うのですけれど、本当に文章書かせたらまずい文章書く学生いますね。本当に京大生かな、と思う様な、主語と述語が一貫しない様な子もいますしね。今、英語のテキストを翻訳する仕事をしているのですが、学生に訳させて、それを監修してると、まあびっくりするくらい、自分でも分からない訳をしている。それ訳してても平気。英語力、基礎的な英語力、英語読解力、かなり低い場合もある。そういう子達とつきあってるんですが、どっかで気付いたら、伸びてゆく潜在能力は持っている。ただ私、今、意見として言いたかったのは、それじゃあ、いろんな考え方と言うか、それぞれの先生が、独自にチャレンジをしていかれる。そういうチャレンジをしている先生に、いろんな話を聞きたいです。基礎学力が重要だと思うから、私はこういう授業をこれまでずっとやってきて、5年たって今のところこうだと、こんな反応であると。そういうふうに、先生方独自、御自身の感性、感じられたことで、どんどん授業改革なさっていく。高等教育教授システム開発センターがこう言ってるからこうしましょう、とそれでは全然迫力がないし、先生方もそんなこと思っておられないと思うんですよね。もっと身近な教官が、あ～僕とこの学生は多分こうだろうと。大失敗でしたと。実はこうだった、という話もあると思います。先生方が独自にやっぱり研修して、研究して、チャレンジしていかれる、そういうことをまとめるセンターが、ここにあると非常に嬉しい。

〔藤岡〕たぶん私はそういうスタンスで考えているんですね。やっぱりそれぞれの特徴があって、「どうしても」ということと、「後からでも追い付ける、興味さえもってくれたら、かなりどこまで伸びるんだ」と。文科系だとほとんど、そうじゃないですか。

〔河野〕ただ一つ言えることは、語学の問題は大変難しい。それは例えば、無理やりにでも、強制というか、しなければならない。それをはずしてしまうと、語学に関しては話しにならない。教育に関しては、そういう動きが非常に多いですよね。強制しなければ語学は上達しないということはまず認めますが、京大生全員に対してそういうことする必要がありますか、っていうことをよく考える必要がある。

〔藤岡〕仮に強制して、単位の認定をきつくするということは出来ないんですか。

〔河野〕先生がみな賛成なら出来るんですけれども、多くの人が賛成してやるか、というと、やはり自由との関係

なので。成績の面だけで、皆さん賛成して、一生懸命やっていただくということにはならない、という現実がいっぱいあるのですね。学生に強制するならば教師も強制しなくては。教師に関しては自由ですから。しかし、学生をきっちりと教え、レベルを保ち、成績をきちっと付けなさいよ、ということをどうやって強制するのですか。だいたい学生を強制する、というお話しが多いのですけれども、学生を強制する為には、教師を強制しないといけないということを皆さんお忘れになっている。まず教師を強制することを議論していただければ、私は賛成です。

〔藤岡〕それは点数をこういう配分で付けるということですか。

〔河野〕それでも結構ですから、そういう議論があって、あなたは、教科はこういう持ち方をして、このように点数は付けなさいよ、というのを話しあっていく。このように、学生を強制する前に、まず教官を強制することを考えていただかない限りは、私は不可能です。

〔藤岡〕何人かの教官が担当している場合には、平均をこれぐらいに持ってこいということも含めて？

〔川﨑〕そういうふうに平均をもっていくと、この答案について、何で＊＊点付けたのですかと言われる。これはアメリカで言われているのは知っていて、僕はなるほどなと思った、と同時に仰天したんですけれども。60点の答案見せなさいって。60点の答案を見せろって言われたらきついですね。60点の答案なら見せますけれど、70点の答案は見せません、ってしない限りは、ちょっと僕はきついですね。

〔河野〕今でも法学部の場合には、平均点をある程度のところにする配慮って言うのがありますか。

〔冨谷〕ありますけどね。失敗した時にちょっと困りますね。問題が難しすぎると、もう一回やり直さんといかんですね。そして一方ではそうならないように、通さなくてはいけない。沢山落とすことについては、多分、学生の苦情が増えると思います。ただそれは学生に対して、納得させるだけの授業の内容と、問題の出し方を教官側の責任としてしっかりすれば学生は納得する、と私は思っています。教官が努力して、切る者は切る。落とす者は落とす。これで学生は納得です。

〔川﨑〕それはですね、何回か教官が集まりまして、数値を出して点数の配分チェックをしてます。我々は学生のレベルを確保したいんですけれども、実際にはおっしゃるように７割とおしてやることになってしまいます。

〔河野〕それを見かけ上避ける方法は、７割単位出すんです。学部からは７割位にして下さい。あと３割は面倒みます。こうおっしゃりますんで、先生はできるだけ７割の者に単位つけるようにするわけです。

〔藤岡〕工学部はだいたいうまくいってるといえるでしょうか。

〔河野〕最終的に専門の場合、自分自身に返ってきますからね。ダイレクトに学生とのつながりが近いでしょう。全学共通科目になりますと、学生と教官との距離がはっきり言って遠いわけですから。要するに、自分とこ通過さえすればいいわけですよね。逆に言いますと、学生も通過したがると共に、教官のほうから見ても通過させとけばいいわけですよ。そこの問題というのは総合人間学部に押し付けられてますから、これはちょっと解決のめどって言うのは難しいですね。

〔小田〕全学共通科目でも、例えば数学は、やはりどうしても、こう言っては何ですけど、先生によって優しい先生を選ぶということがありますね。

〔河野〕100%そうです。当然学生はそこに集中する。そうしますと、それを防ぐ方法っていうのは、ある程度教官の中でのコンセンサスを徹底すること以外ないんではないでしょうか。そうしますと、次に、例えばそれぞれの科目の中で、ある程度の自己規制って言うか、少なくとも全員を通すなということは徹底してもらわないと。さすがに全員通すというのは、ここ一年は無くなったんですけれども、過去については存在します。

〔藤岡〕何千人て受講してて、皆通っちゃう共通の科目があると聞いてびっくりしたんですけれど。

〔河野〕意外と僕が思ったよりは少なかったのは、皆さん少し注意されて、少しは落としてるな、と印象は受けました。1、2割落としとけば、今のチェックポイントから外れるわけですよね。だからそうやって少しずつチェックポイントからはずしていって、それがどこまでいくか。今はそういう努力は無駄な感じはありますけれど、その努力さえも、誰がコストはらうか、ということに関しては、かなり疑問です。

〔藤岡〕たぶんFDというのは、そういうとこまで具体的にやってきて、テストの問題から進級の問題、カリキュラムをどうするか、そういうとこまでいかないと、本当にFDにならないと思いますね。そこで「我々はこうやってますよ」、「こんな授業があります」、「こんな考え方が示されてます」、それこそ小田先生がおっしゃるような、そういう役割を、いまこのプロジェクトが果たしているということです。が、「もっとこういうふうにしたらいい」とか、「学力は下がってるんだぞ」という警告を発するとか、そういう役割を期待されているということでしょうか。

〔冨谷〕ちょっとそれは、私にはつらいなという感じがするのです。

〔小田〕そうなさってもいいと思いますよ。逆にそれでどういう反応になるか。何かやらないといけませんものね。

〔河野〕両極端の意見があると思うんですね、高等教育センターについて。私が具体的に聞いた話でも。要するに「あそこ何やってるの」という意見もある。これはここは別にそれなりの発表なり、気を配っておられるわけですからね。報告書なり。それからもう一つ、過大な期待されるかた、話を時々聞くんですけれどもなんかあると。「そういうことは、あそこでやってもらいなさい」とこういう言い方をされる人がいる。これは僕は両極端だと思うんですね。結局FDっていうのは個人から出発する問題なわけですから、誰かにやってもらっているわけではなくて、なんらかのきっかけを作るなり、材料を提供する所というとこがなければいけないわけなので、そういう点でも、ここの役割っていうのは非常に大きいなと思うし、それから先になりますと、それぞれ個別な問題だとは思うんですけどね。昔はFDっていう概念も、これは京大に限らず、日本の大学にFDっていう概念は無かったわけで、私もFDというのは数年前まで知りませんでした。

〔川崎〕そのへんの議論が教官の中で本当に沸き起こるには、そういうものが、あと2年後とか3年後に立ち上がって教官の話題になる必要がありますね。

〔藤岡〕私共のセンターの今のスタンスは、そういう外部から、一般的な評価のフォーマットを持ち込んで、成績を高い、低いというような、そういう議論はしたくない。授業を自ら振り返り、改善の意欲を高めるような、そういう動きを作るようなことがごく大事で、外の手を借りて、事務的に評価するような、そういう姿だけは作りたくない、っていうのが我々の考え方なんですよね。

〔石村〕もう一つ、我々が授業を実際に見せていただいて、河野先生がちょっと前に言われたことなんですけれども、見せていただいた授業に非常に良い授業が多くて、先生がさっき言われた授業の工夫の余地があるっていうのは、個々の授業の工夫ではなくて、多分、それをつないでいく、例えばカリキュラムを集団的に議論するとか、真

剣に学生についてちゃんと議論する、そういうことで、そこから立ち上がってくるものがあるんじゃないかなとは思うんです。一番思ったのは、理系の「知識伝達型の授業」ってずっと言ってきたんですけれども、そう単純じゃ無いんだというのがよくわかったんです。先生の授業もそうなんですけれど、教科書っていうものを一段高いところから扱って、すごく簡単に言うと、馬鹿にしておられて、「ここ何ページから何ページを見て下さい。これは全部嘘っぱちですからね、こうこうこうやってやりますけど、実はこう言うことがあって、こういう苦しい書き方になってます」、とか。法学部でも同じ印象を持ちまして、テキストがあってそれを覚えこませるのかな、と思ったらそうじゃなくって、「ここから読んどいて下さい」そう言ってしまう。そして、そこに書いてない事例をあげてきて、実はこう書くのはこういう背景があった、という形でやってらっしゃるんですね。授業はどの授業も、非常に工夫されていて、単純に学生達にやらせればいいんじゃないんだということではないんだな、と思いました。なぜこれがうまくいかないのかな、と考えますとネットワーク、それから授業についての集団的な議論という所に、僕は問題の本質があるのではないのかな、と今のところ、見ているんです。

〔冨谷〕お言葉ですけれども、私は、私のも含めて、大半の授業というのはむしろ工夫が足りないと思います。工夫が足りないというのは、何かと言えば、一つには京大の教官に「授業好きですか」と、そういうアンケートをとると、だいたい、三分の二は、出来れば授業をしたくないと思っているのではないのでしょうか。それは私の様な研究所員の意識には、それがより強いといえます。それともう一つは、授業の準備にかける時間っていうのはたいへん少ないと私は思いますね。だからどれ位の準備をしましたか、と言われると、こんなこと言うと失礼かもしれませんけれど、殆どが自転車操業だと思うんですよね。コマ数が多い、だとかいうことが必ず出てきて、極端な例で言うと７、８コマぐらいはあるみたいですけれど、準備も何も出来たものではないと。準備をすれば、それだけの効果が上がるのは確かです。時間が無かった、そして自転車操業でしゃべらなきゃならない、となると、自分でもわかっていますが、後味の悪い授業になってくるんです。授業準備にかける時間の問題、それともう一つは研究重視の問題です。

〔川崎〕やっぱり、教育は研究成果を発表するんだ、ということを学生の頃にはよく読んだんですが、それは死語ですか。

〔小田〕自分の専攻を授業で生かせませんかね。まったく学会で言えるかどうかわからない様なことを教養の授業では言ってる。昔は、学会の様な場ではまだ言ってないことを学生の前で発表していた。その緊張感と面白さが教官にあった。今の教官は、学会で論文を発表していますから、授業はエキストラワーク、余分な仕事で、アクティビティをどうしても持てない。そこを何とかしなければいけない。それを大学のシステムで、ある程度サポートできるかもしれないけれど、「君ら何で大学来たの」と学生に言うからには、教官も「何で大学教官はってるんだ」、ということですよね。皆自分で悩んで、教官は自分でやるしかない。サッカー選手、ラグビー選手でも、皆、自分の文体、自分のプレイスタイルを持たない人は、ナショナルプレーヤーから外されます。そういうことは、やっぱり我々スポーツの世界と似ている。日本代表の選手達は厳しいですよ。我々は、アマチュアの世界かもしれない。学生はそのぬるい世界にいて、いつのまにか、一回生の時批判していたのに、だんだん四回生になって、おとなしくなって、いい子ちゃんになって、随分変わってしまう。その様なことを学生時代からずっと思ってましたし、今46才で、まだ若い教官ですけれど、思いますよ。私はなかなか馴染めなくて、スポーツにいたもんですから。特にそういうことを思うかもしれません。しかし論文も、今どれだけ書けているか分かりませんけれども、一つの実力の世界だなと。これはスポーツの世界と別かなと思っていた。しかし、今ではある意味ではすごく似ているという思いはありますね。授業やることと、研究して論文書くことが何か自分には、別々であってつながっていると思います。

〔河野〕分野によって違うという言い方もあるんですけど、もちろん分野によるばらつきというのは、あると思うんですけれども、研究っていうのは、まったく自分の内部に閉じこめてしまって、まったく外に発表しないという

のは、別ですけど、これが一応自分の趣味だけでやってるわけでない以上は、発表する義務は最低ある。そうすると、どんな研究でも、何らかの形で外に発表してみる、ということは、僕は役に立つことだと、自分の為になることだと思いますね。そのレベルがいろんなことで、多少どうこうとなりますけれども、大学のレベルで教育するということは、それは研究のプラスになる。そういうふうに私は思いますね。それから一回生に話すのはどうかとなるわけですよね。一回生についてもせめて一コマぐらいしゃべることは、御自身のプラスになるんではないかな、というふうに私は思います。それを超すとちょっと負担が多すぎると思います。教育の負担が大きくなりすぎて教育が全否定される傾向にあるんじゃないかなという気はありますね。結局は教育の量によるんじゃないかなとは思います。学生をもっていると言う以上は、当然教育は最低義務としてあるわけですし、それも全くの義務という訳でなくて、教育と研究と一体になった教育というのはありうると思います。

〔川崎〕教育が義務とおっしゃったんですけれど、今の全般的な教官の教育に対する捉え方はそこだと思いますね。つまり義務的に捉えている。そこを義務じゃなくて、権利だというふうに、教えるのが権利で楽しいんだ、というふうにするにはどうするか。それが結局、教育システムの改善になっていくんだと思うわけです。だってやってるのは先生ですからね。先生がやろうという気があればいいわけです。何度も言いますけれど、それが、なかなか持てないというのが現状なんですよね。だから必ずしも学生さんの責任ばっかりじゃないと思うんです。学力低下とかいわれてることについて、なぜだろうかと考えると、教育を一生懸命やろうと思っている先生への評価が低いからだと思います。そこを何とかしたい。これが本質的なところじゃないでしょうか。

〔藤岡〕楽しいんだ、で、こんな世界があるんだ、っていうことが提供できればいいわけですね、我々のほうで。どうも何かすいません。唐突な締めくくりになりますけど、最後に一言ずつ、感想なり言い残したことをお話しいただいて終りにしたいと思いますけど、いかがですか。

〔河野〕さっきから申し上げているように、教育に、より力を注いでいる先生の評価をどうするのか、これは一番大きな問題です。例えば論文の数で評価される。それから学会での評価。決してそういうのではなくて、あの先生は教育がとてもうまい、それを、どのような形で評価していくか。

〔小田〕そうですね。教育の楽しみが見出せない間は本当にしんどいですよね。教室から帰ってきたら、ふ〜とため息をつく。この間、藤岡先生が入って来られた時、次1時間あけてゼミがあるんですけれど、楽しんでらっしゃるなんておっしゃったけれど、相当緊張してますし、エネルギーを相当、食います。だから本当いうと授業はある程度の範囲でできるので、それ以上持つと、手抜きの授業になります。他に論文を書け、直せって仕事が来てるわけですから。だけれども、研究のアクティビィティというのと、自分の中で授業のアクティビィティが、どうも切り離せない。切り離せてる人はうらやましいなと思います。しかし、本当にそれで研究の成果が上がってるのだろうか。義務的に研究して、論文の数だけ、数合わせをするというようなことでいいのか。それはやはり大学教官の質を問われてることになるんではないでしょうか。そういう制度がなければ、そういうことが出来ない、っていうことを京都大学は世間に訴えたら、かなり批判を受けると思います。

〔冨谷〕教育のインフォメーションを流して欲しいと思います。例えば、こういうふうなやり方がある。それは日本の大学、私学でのシステムでもかまいませんし、欧米のシステムでもいいんですけれど、こういうふうにすればいいんだ、というのを教えてほしいんです。我々は知らない。これが要求の一つです。もう一つは、エバリュエーションシステムていうのをどうすればいいかという点を考えていただきたい。その2点です。

〔河野〕なかなかうまくまとまらないですが、一つは教育評価ですね。研究評価は比較的簡単だけれども、教育評価をしてほしいという議論がある。ただ私の意見は教育評価というのは、まず第一に研究評価ほど簡単ではないということ。それから何をもって教育評価をするのか。誰がするのか、その結果をどう反映させるのか、については

多々やっぱり問題がある。こういう言い方をすると、ちょっとはっきり焦点が合わないんですが、逆にひらき直って、教育評価が必要なのかっていう、たえずこれは逆転の発想って言いますか、どうしても行きづまった場合は正反対のことを考えてみろというのが、ある程度、私の発想の一つのやり方だと思いますので、どうしても、行きづまって解決がない時は、まったく正反対を、とにかく考えてみようという考え方を適応させていただきますと、私にはちょっと教育評価という、それが必要だという発想そのものにちょっと疑問をもっています。それは比較的研究一本のかたで、研究をされていた人達に対して、今の学部が、急に教育にめざめるというか、教育をせざるを得ないとなった時に、これを評価してくれという言い方なんですね。評価してくれなきゃならないんだぞ、ということが逆に言うと入ってるわけです。しかし教育ってやっぱりそういうもんじゃない。そうすると、教育評価ってありうるのか。僕はあんまり評価、評価とおっしゃらないほうがいいんじゃないかな、義務でやるものを、義務でないかのごとくやるというところに、教育の原点があると思うのですね。だからこれは何でも、生き様を見せればいいとか、本音を言えばいい、というのと、私はちょっと逆転の発想をするのですけれども、本音を言ったらすべて無茶苦茶になっちゃうんですね。本音が言えないからこそ建て前があるんですね。すぐに本音を言え、本音を言えばいいとおっしゃるけれど、本音を言ったら本当に話合いになるんですかね。日本だから言えるんですけれど、パレスチナとイスラエルがですよ、本音で話し合ったらどうなるんですか。本音を話し合ったら絶対駄目だから、本音を言ってはいけないんですね。だから本音を言えば何でも解決するというのは、日本的平和主義なんですよね。例えば生き様一つにしてもそうでしょう。やっぱり生き様の表であってですね、本当の生き様見たら混乱がありうるわけです。そういうのあれこれ考えますと、教育評価というのはあり得るのかというのがまず第一の問題で、じゃあ教育評価しなくてどうするかと言いますと、そこんところは僕は明解な答えっていうのは無いんですけれど、一番不満なことって、教育にはいろんなやり方があって、評価にもいろんな対応性がある、ということを、お互いに言い合う以外にない。評価から何かを求める、あるいはその効果なり、ランクをつけるなり、お金に換算して、とかいうようなとこには絶対に発想さしてはいけない。インパクトとして一部の授業評価みたいなことがやられており、一定のインパクトがある。それを深めていくのはいいことだと思います。そこから、あんまり、いい評価とか、どうしたらいいか、ということで出そうとすると、とたんに拒否反応がある。例えば湘南藤沢キャンパスで、井下さんでしたかね、が非常に印象的なことおっしゃったんですけどね、あそこは最初の学生の授業評価をすると、最初の数年間は、先生も応えようとするから、目に見えて改善されるんですって。ところが改善ってやっぱり限界がある。そうなると学生のほうも、いくら言っても無駄だと思う。教官から見てもこれ以上できないということになる。そうなると今度は開き直りのほうになるんですね。学生からみたらなんぼ言ったって改善してくれないじゃないかって言う限界に近づいてしまう。数年たったらそうなるんです。

〔川崎〕僕はここの学部来る前に研究所にいたんですが、研究所は研究評価が悪ければつぶされます。しょっちゅう機構変えていかなくてはおとりつぶしになってしまいます。学部は、つぶれないからいいなあと思ってたんですけど、これから許されないでしょう。したがって教育を重視することに切り替えなければならないでしょう。かつては研究だけをしてたらいいとされていたのですが、そういうことも無くなってきている。

〔河野〕たぶん社会への還元ていう具合になると思うんですね。学部の場合は、学部の学生が、その後、どう活躍するかがわりかし clear ですよね。ところが研究所というのは、これ悪いのは、教育をするときのメインの対象がいない。だから、社会への貢献度なり社会への関わりということに焦点あてられると、公開講座にしろ、いろんな活動をしないといけない。

〔川崎〕専門家を養成する目的で院生を集めて教育する。そういう形での期待とは別に、社会への還元ということを考えざるを得ないということですか。

〔河野〕社会への還元とはちょっと抽象的ですからね。具体的に、研究成果を上げることが社会への還元だ、というぐらいのおっしゃり方をされても、別にいいと思います。そこのところをメインにされないと自身の存在を問わ

れますから。

〔藤岡〕研究所の先生は、むしろ集中して授業を準備出来る。

〔河野〕個人差が大きいですよね。研究所の教育対象は、ふつう大学院以上なんですけれども、研究所のある先生は、非常に熱心に全学共通科目をやっておられて、一回生対象の授業について我々以上に熱心にやっておられますね。一コマか二コマですけども。それでも、あれだけ熱心にされる先生は、ちょっとおられないですね。かなり専門の方でも有名な方で、すごくアクティビィティの高い人なんですよね。その人が全学共通科目一回生の授業を非常に喜んでやっておられるんです。

〔冨谷〕提言ですけどね、全学共通科目を是非、退官の教授にも、持っていただく。総長経験者にも。それから、それ以外の、とにかく、アクティビィティがあって、時間のあるかたは沢山いらっしゃると思いますね。

〔川﨑〕北大ではやってます。退官された先生に2年間教養で教えていただいています。だから出来ないことはないんです。それから、総合博物館でも、そんな提言しておられましたね。僕は東工大、三重大学、北大、と回ったんですけど、学力の低下ってどこでもすごいですね。ちょっとお聞きしたいのは、総合科目での強制、それから評価の問題。東大の場合は、選択というものが教養学部での成績でもって評価されますね。あのシステムでは、仮に一人の先生が非常に甘い点数をつけると、そこに寄って来て良い評価がもらえる。そうしますと、三回生からの希望の選択が出来なく、ふるい分けが出来なくなる。その辺は東大はどの様に解消されてるのでしょう。

〔河野〕東大はまず、いわゆる、進振っていうのは全員ではないと言うことですね。文Ⅱで経済学部に行く学生は殆ど、進振が無いんじゃないですか。法学部に変わろうと思えば別ですけども。それから理系については、かなりシビアで、全部の成績ではなくて、この授業と、この授業と、この授業は進振に影響しますよ、というのが指定されていて、その授業に関しては、かなり共通のプログラムとシラバスと共通の成績評価を付けるように努力はしてる様です。それから進振自体については、だいぶん批判があったようですけれども、これは東大の先生が非常にはっきり言っておられて、これは当然のことなんですけども、これは学生をおさえる道具として絶対に手放さない、ということを言っておられる。明解に学生支配の道具です。それは意識しておられます。京大の場合どうか。そういう学生支配の道具を導入することは出来ません。あるものを維持することはできますが。

〔川﨑〕工学部化学系では、4回生においても行きたい希望の所の研究室を選ぶ段階でふり分けていることになります。3回生から4回生に上がる時にチェックポイントを設けてますから、そういうのは勉強させる工夫・動機にはなりますね。だから一般教養と言いますか、1～2回生の総合科目で勉強さすためにどうしたらいいのかということが問題なのです。

〔河野〕その時に、例えば数学ですと、我々は工学部の教官でないから、工学部の学生のレベルについてそう責任とれない代わりに、情けをかける必要はないですね。学生は必ず泣きこんできますがね。それから卒業の時になるとやっぱり指導教官から単位を出してくれということは、もちろんあります。そういうこともありますと、必修というのが、どこまで学生に効果的な勉強させる方法かというのが、かなり疑問です。

〔川﨑〕やっぱり学生さんで勉強してない人を見ると、ひょっとして間違って入ってきた学生がいるんではないかと思うときがあります。化学をもともと志望してないのに、入試の点数で化学に来たのだと思える学生はかなりいると思いますね。

〔河野〕変われないというのは変われないように、してるんです。やっぱり本能的にそれをくずして、大学全体が非常にしんどいことになるっていうのを、教官集団っていうか、大学が思ってるからじゃないでしょうかね。京大はまだ、ましだといわれてるんです。が二桁程度の人数は転学部してますからね。これは、まだ相対的には多いほうです。京大だけがきびしい話じゃないですよ。ただそれを、もうちょっとゆるめますと、予備校が最初からあそこの専攻に入って、それからこうしなさい、とやっちゃうから、やりたくっても出来ないですね。いったん化学が優しいとなるとまず、化学に入ってきます。それから変わりなさいってこと。これは理学部が一回失敗しまして、転学部の条件が予備校にわかっちゃって、理学部に入る為には、どっかに入っといて、それから理学部へということになる。京大の中で一番やさしいところに入っといて、それから理学部へ行くというのを、予備校が宣伝し始めた為に、転学部の希望者が激増したことがある。建て前だけでおしきると、必ずそういう裏面があって、これは完璧にゲームですからね。受験生対京大の。こういう制度にすれば、それに対してどうすれば一番いいかってことを考えるわけですからね。必ず弱点ついてきますから。必ず結果が出て、そこを変えなくっちゃいけない。入試問題を一つ作るのにも向こうは必死でやってきて、こちらはそれに対して受けて立とうということにはなっていない。入試問題作るの嫌だな、採点面倒くさいなあ、という、その形でいったら、結局はっきり言って、予備校ほどの熱意と真剣さにかなうはずがない。

〔川崎〕そりゃそうですよ。僕は入試センター試験2年間やらされたんですけどね、出張日数が1年間48日、2年間ぶっ続けでたいへんでした。研究はせないかんわ、人には言えへんわ、会議さぼったら所長に怒られるわ、で困りました。

〔河野〕ただ残念ながら、例えばセンター試験の数学などについては、これは数学ではないぞ、と。これは記憶力と集中力と忍耐力のテストだと私は言っている。

〔小田〕河合塾の何とかって方が書いた『悪問だらけの大学入試』[1] というのが最近出て、それを企画してる方を私知り合いでして、さっそくいただいたんですけどね。見ましたら、最近の大学入試問題はクイズみたいなの出てますね。いわゆるテレビの三択、四択問題。こんなのは、何の意味があるのって思います。まったくクイズの様な問題が大手を振って、これじゃあ河合塾が本当に嘆いてますよ。これじゃあ予備校に入試問題作ってくれと言うわけだと。相当多くの大学が、問いあわせてきたそうですよ。こんな大学まで、というのが皆、入試問題を作ってくれって頼む。

〔河野〕例えば数学とか英語とかは、基礎的な教官がやってるんです。しかし、そうした先生は減らされています。中での授業が減ってますから、教官減らしてるわけですね。ところが、それは入試に必要な分なんですね。国語にしろ英語にしろ数学にしろ。そういう教官をどんどん減らしてるわけですよ。そうすると、ますます入試に負担がかかるから、ますますクイズ的なのを出しちゃう。ある大学の講師の先生が話しておられますけれども、数学を専門でない人に出題させたら大失敗したんですね。無茶苦茶にやさしく、ある意味でやさしくした。慣れた人でない人が数学の問題を出しますと、極端にやさしいか、極端に難しいか、どっちかなんです。そのところ、専門ではない人が適当に数学を出したら差がつかないで、そこで僕のとこに相談に来た。そんなの今さら、ということで、僕の答えは、名古屋だったら河合塾に相談しなさいといってやりました。数学の先生を全然持ってないところは、河合塾とか駿台とかの成績を取り寄せて、受験生のやつを全部調べたらいいんですよ。それが一番簡単ですよ。相手が知らないうちは絶対いいですよ。自分のところで、なまじ一人の先生が、毎年、毎年、似たような問題ばかり出すよりは、出した振りをしといて、受験者の全部、今だったらコンピューターで全部チェック出来るんですからね。河合塾とか全部契約しといて、そこで受けてる学生の数学の成績見たらすぐですよ。そこ一番確かですよ。数学では物を覚えると言うよりも、証明、思考をどのようにして整理して、証明していくか、ということが大事な訓練だと思います。昔から言われているのが、そのためにはユークリッド幾何を教えるのがよい、と。でも、これは一時期、福井先生が頑張って、一時残ったんですけれど、妙な形で残っちゃって、かえって弊害があったという話を聞

きました。あの頃から全く無くなった。昔は幾何の論理ていうのがそれなりにわかる人は面白かった。また、幾何が好きな文系というのも、いっぱいおられたんですけどね。

〔川﨑〕教育環境でいったら、僕4年前にこっち来たんですけれど、初めて来た日、工学部の建物の中庭に焼却炉があるんです。僕はびっくりしました。大学の建物の研究室の真ん中が工場みたいなんですよ。それで、ちょうどその何か月後かにオックスフォードに行って、カレッジに泊めてもらいますと、前は芝生の綺麗な建物でした。あういうところに学生さんは2年間いるわけです。そういう所で、まるで王侯貴族のようにすごす者と、一方工場の隣りの教室で学んで下宿は四畳半に住んでいる者とが、さて世界的に付き合った時には、絶対負けやと思いますね。

〔小田〕スポーツの世界でも、ナショナルチームになったらものすごい。ラグビー日本代表チームのコーチで遠征した時、国賓扱いしてくれました。英国で。あちらの選手達もそういう扱いですよね。国歌が鳴りますから。その分試合の時にはロイヤリティーというか連帯性というか、ものすごい。あんまり、おだてて「お鼻てんぐ」の学生ばかり作っちゃいけませんけど、本当に大切に扱って、学生諸君を素晴らしい環境で学ばせ、我々も、それなりの心使いをして。

〔河野〕データー上は、学生の愛校心というデーターがあるんですが、京大はトップなんですよ、ほんのわずかだけども。綺麗にしたら、愛校心は、無くなるかもしれません。

〔川﨑〕芝生の立派なカレッジで、教育すれば非常にいいんじゃないかな、と思います。学生さんにとっての初期条件を取り替えられるなら、いろんなことは考えられるんだけれども、難しいでしょう。

〔冨谷〕オックスフォード、芝生、教育環境といえば、私は、学生に必ず読めと言っている本があります。それは、岩波新書から出てます池田潔という先生が書いている『自由と規律』という本です[2]。それはケンブリッジのリーススクールで著者が学んだ、そこでのいわば寮生活の体験を書いている話なんですけれど、イギリスでの自由というものは何か、規律というものは何か、そして特権階級、つまり選ばれたエリートが持つ責任というのは何か、ということを植え付けていく教育でもあるんです。

〔川﨑〕オックスフォード出身の学生が私の研究所に居たことがあって彼らをみると大人なんです。ところが、同い年やのに、私の学生は子供なんです。イギリス人に聞いたら、そもそも大学院生には国から海外滞在のお金が出るそうです。だから、学力が無いのも、設備の整ったトレーニングのシステムが無いからなんですよね。そういうのをちゃんと与えてやれば、伸びる学生はかなりいるんですよ。そういう提案もここで考えて欲しいと思います。

〔藤岡〕薬学部の科学英語、これ中国人の先生なんですよ。会社を経営してる方が、非常勤でやっておられるらしいんですが、凄いですよ。2年生ですけれど、立派にプレゼンテーションして、ディスカッションします。先生に聞いたら、「いやあ、私いくつかの大学やってるけれど、ここの学生はやっぱり違います。本当にトレーニングのしがいがあります」といわれた。

〔川﨑〕あっ、それはね、他の大学から来たらすぐ判りますよ。修士の発表会が終った後、感想言えと言われたから、「ここの学生さん口がうまいですね」と言うて笑われたんですけれど、他の大学と比べて全然違いますね。しゃべるのがものすごくうまいです。だから語学も、今言ったように、学力が低下してると嘆くんじゃなくて、システムを考えてもらったら伸びると思うんですよね。そこが僕はここの高等教育教授システム開発センターの先生方の責任やと思うわけですけど。よく伸びるシステムを考えてほしい。

〔河野〕語学に関しても、各学部によって全然ニーズなり、要請っていうのが違うんですよね。京都大学全体とし

ての統一的なことがやりにくい。

〔藤岡〕今日は長い時間、貴重なお話しありがとうございました。本日の記録はテープをおこさせていただいて、センターの発行する叢書の中に出させていただきます。

〔河野〕こういう形で出されますとね、京大の教育というのは、なかなか熱心にやってるなと、印象を持たれてしまうと思うんですが、もっと改善すべき点ということを強く言われないと、改革ということにならないんじゃないですか。これだけ読むと、「なかなか、すごいな、京大は一生懸命やってるな」、という印象で。「もっと考えていかなくてはならない、もうちょっと皆さん考えて下さい」、という方向にならないと思うんです。

〔藤岡〕そこで先生、一つはですね。学生さんからこういうふうなメッセージを先生方に送ってるのに、学生のほうの感想では届いていないと思っている。それはどうしてだろうか、ということを考えましょう、というようなこととか、京大の悪い例は出せないですけど、もっと改善できますね、って言う提案はできると思っています。

〔石村〕やはり、授業を変えていくためには、まず、その授業の良い所を率直に指摘することなんだろうと思います。やっぱり永い目で見たときは、まずそこから出発していくのが基本かな、と。非常に意識の高い人は、授業を早く直したいという思いは、おありと思うし、このプロジェクトはそれを応援できる。また、こういうところに来ていただく先生は極一部なんですが、こちらから出ていくということをやることは、必ずしも意識が高くない先生方にも自然に参加していただくことができる。これは、センターの地道な活動としていいんじゃないかな、というのが僕の感想です。本日は本当にありがとうございました。

（文責　石村　雅雄）

〔註〕

(1) 丹羽健夫『悪問だらけの大学入試』集英社新書、2000年。

(2) 池田　潔『自由と規律：イギリスの学校生活』岩波新書、1963年。